慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山家集伝本考
Sub Title	
Author	寺澤, 行忠(Terasawa, Yukitada)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1981
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.18 (1981.) ,p.373-441
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	麻生太賀吉大人追悼記念論集
	挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000018-0373

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山家集伝本考

寺澤行

忠

はじめに

表されている。

た。その成果は、「日本古典全書」(朝日新聞社刊)中の『山家

行』所収、昭和三十一年七月、鷺の宮書房刊)などによって発(昭和十年二月、大岡山書店刊)、「西行歌集の展望」(『歌人西れで本広く用いられている。右の、底本及び校本として用いらたものとなっている。『山家集』のみならず『聞書集』 その他たものとなっている。『山家集』のみならず『聞書集』 その他集』(昭和二十二年十二月刊) に受け継がれ、 さらに完備され

誤りを流布版本によって正したものであり、後者は、陽明文庫高。前者は、陽明文庫蔵六家集本を底本とし、底本の明らかな四十九年七月)に於ても、陽明本が底本として用いられてい四十九年七月)に於ても、陽明本が底本として用いられてい四十九年七月)に於ても、陽明本が底本として用いられてい四十九年七月)に於ても、陽明本が底本として用いられてい四十九年七月)に於ても、陽明本が底本とし、底本の明らかなる。前者は、陽明文庫本が、日本古典文学大系」(岩波書店刊)立ちにその後公刊された「日本古典文学大系」(岩波書店刊)

蔵本の本文を、「可能な限り底本に忠実な形において翻刻」 たものであって、解題が付されている。 l

家集』(昭和五十六年四月、 新典社刊)では、 陽明本をよりよ 又、近時桑原博史氏によって編纂された『西行全歌集上 山

く理解する上に役立つものとして、筑波大学蔵本がとりあげら を補ったうえで、同本の詳細な解題を付されている。 れ、同本が翻刻されている。さらに松屋本、別本などにより歌

『山家集』諸本に関する研究に、「山家集諸本の研究(一)」

(高城功夫氏『東洋大学大学院紀要』 昭和四十六年三月) があ 諸本を博捜され、丹念に調査されたものであった。

個々の伝本については、まず松平文庫蔵本に関しては

三」(糸賀きみ江氏、『和歌史研究会報』四十二号、昭和四十六 「松平文庫蔵本 『山家集』 について――西行関係典籍略解題

年六月)

日本女子大学蔵本に関しては

きみ江氏『和歌史研究会報』四十八号、昭和四十七年十二月) 「日本女子大蔵本 『山家集』―西行関係典籍略解題四」(糸賀

市岡氏蔵本に関しては、

氏・杉谷寿郎氏) 報』五十七号、 ·訪書雑記」所収市岡勝太郎氏蔵山家集解題(『和歌史研究会 昭和五十年十月、橋本不美男氏・久保木哲夫

研究会報』五十七号、昭和五十五年十一月)

「山家集―市岡勝太郎氏蔵本紹介―」(糸賀きみ江氏『和歌史

書陵部蔵丙本(桂宮本)については、

『図書寮典籍解題 文学篇』(宮内府図書寮編、昭和二十三年

十月) 又松屋本に関するものに、

「古鈔本山家集残闕本について」(伊藤嘉夫氏、『文学』岩波

書店、昭和九年六月号)

店、昭和十年二月号) 「松屋本『山家集』について」(高城功夫氏、『和歌文学研究』

「新たに発見された西行の和歌」(平井卓郎氏『文学』岩波書

などがそれぞれある。

第四十三号、昭和五十五年十一月)

『山家集』の伝本に関する研究は、大いに進展をみたので ある 以上の如き、多くの先学の優れた研究の積み重ねによって、

374 -

が、なお今後に俟つ問題も少なくないように思われる。

排列及び異同の面から、又本文については、問題を含むと思わ ていないが、これは他日を期することとし、今、主として歌の を調査することを得たと信ずる。本文全体を精査するには到っ れる箇所を抽出調査することにより、『山家集』 諸本に検討を さて、『山家集』の伝本については、今日までにその殆んど

加え、それらの諸本の性格の概要を明らかにしたいと思う。

今日までに管見に入った諸本は、次のとおりである。(括弧

一、版本系諸本

1版本

2長崎県立長崎図書館蔵〔江戸後期〕写

京都大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写8書陵部蔵〔江戸中期〕写 乙本 男書陵部蔵〔江戸中期〕写 乙本 学習院大学国文学研究室蔵〔江戸中期〕写	第一類本二、陽明文庫本系諸本二、陽明文庫本系諸本	東北大学附属図書館狩野文庫蔵〔江戸後期〕東北大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写 甲木大倉精神文化研究所蔵〔江戸後期〕写	14憓久邇文庫蔵〔江戸中期〕写 乙本13穂久邇文庫蔵〔江戸中期〕写 甲本13市立米沢図書館興譲館文庫蔵文化七年写11神作光一氏蔵嘉永七年蒼翠館主人写11神原光一氏蔵嘉永七年蒼翠館主人写	9 書陵部蔵〔江戸中期〕写 甲本4久曾神昇氏志香須賀文庫蔵〔江戸中期〕写 万本6 志香須賀文庫蔵〔江戸中期〕写 丙本7 志香須賀文庫蔵〔江戸中期〕写 丙本7 志香須賀文庫蔵〔江戸後期〕写 丙本7 志香須賀文庫蔵〔江戸後期〕写 丙本3国立国会図書館蔵〔江戸後期〕写 甲本3国立国会図書館蔵〔江戸後期〕写
(京研) (書乙) (勝)	(111)	写乙本(東乙)	(穂 (神) (神) (神) (神)	(志内) (志内) (志内) (本内)
如く、版本は現行西行諸歌集の中で最多の歌数を有し、近世一、本稿に於て、基準として用いたのは版本である。後述する天理図書館蔵竹柏園旧蔵〔江戸初期〕写残闕本平井卓郎氏蔵版本書入れ本	三、松屋本系諸本多和文庫蔵〔江戸後期〕写第四類本	館蔵〔江戸後期〕 戸前期〕写 丙本江戸前期〕写	A天理図書館蔵〔江戸前期〕写 乙本第三類本 第三類本 (江戸前期〕写 京都大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写 京都大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写	天理図書館蔵〔江戸前期〕写 甲本A関西大学図書館蔵〔江戸中期〕写 乙本 東洋大学図書館蔵〔江戸中期〕写 乙本 東洋大学図書館蔵〔江戸中期〕写 「田勝太郎氏蔵〔江戸前期〕写 下岡勝太郎氏蔵〔江戸前期〕写 下岡勝太郎氏蔵〔江戸前期〕写 下岡勝太郎氏蔵〔江戸前期〕写 下岡勝太郎氏蔵〔江戸前期〕写
でし、近世後述する	(多)	(書 所)	(天 (茶甲)	((((((((((((((

広く流布して、多数の読者を獲得したものであるからであ

一、歌の冒頭には、私に付した版本の通し番号を冠し、 に陽明文庫本の番号(私家集大成本番号)を付して対照し 括弧内

一、歌の詞書に付した「 た。歌を引用しない場合もこれに準じた。 」は、前歌に付されているもので

あることを示す。

一、版本では620(65)歌は、 の版本系諸本で、重出歌を算出する際には、このケースは除 491 (組の次)にも重出するが、 他

一、装訂の袋綴、 して省略した。 料紙の楮紙は省略した。函架番号も、 原則と

、書誌の記述には、先学の御論考の中で、既に著録されてい の各本について、広く扱っておられる。 本、市岡勝太郎氏蔵本、お茶の水図書館蔵甲本、同乙本以外 図書館蔵甲本、三手文庫蔵本、日本女子大学国文学研究室蔵 では、本稿で採り上げた志香須賀文庫蔵甲本、東北大学附属 に高城功夫氏の御論考(「山家集諸本の研究」(一)、前掲) るものとの間に、しばしば重複を生ずることともなった。殊

諸本の調査に際しては、上記御論考をはじめ、多くの先学の け簡潔に記述することにした。 家集』全体を通観する必要から、これを省略せず、できるだ

が、先学と必ずしも見解を同じくしない点もあり、又『山

御業績の学恩に浴した。深く感謝申し上げる次第である。

版本系諸本

1 版 本

〔慶安〕刊本

思われ、細川幽斎の編にかかるかともいわれるが、はっきりし 頁参照、昭和四十八年三月、笠間書院刊) のである。六家集は、恐らく室町時代後期に纒められたものと たことは分っていない。(松野陽一氏 『藤原俊成の研究』五九 近世初期、いわゆる六家集の一として刊行され、流布したも

大阪府立中之島図書館蔵本、岡山大学附属図書館池田家文庫蔵 早印の時代には、三十冊本として刊行されたものである。管見 本、佐賀大学附属図書館蔵本、架蔵本等がある。 に入った三十冊本には、神宮文庫蔵本、龍谷大学図書館蔵本、 録』(〔寛文六年頃〕刊)に、「六家集、三十一冊」とある如く、 六家集版本は、 書林書目の中でも初出と思われる『漢書籍目

三名刊)が「後京極、慈鎮、西行、俊成、定家、家隆」として 記載し、『新版増補書籍目録』(元禄十二年、京都永田調兵衛等 に、『益書籍目録』(元禄五年刊)が、 慈円僧正と定家卿を逆に 西行法師右六人の家集」と記されている。以後の目録類を見る 載は、全くみられない。『শ書籍目録』(寛文十年刊)には、「六 家集」の項に「俊成卿、後京極、慈円僧正、定家卿、家隆卿、 歌集の排列に関しては、版本自体には、排列を示すような記

述では、この排列に従って掲出することにする。 がでは、この排列に従って掲出することにする。 がでは、この排列に従って掲出している。よって、以下の記 の文十年刊)と同じ排列で掲出している。よって、以下の記 が書籍題林』(延宝三年刊新増書籍目録、『天和元年刊書籍目録大 を』(山田喜兵衛刊)、『韓書籍目録大全』(元禄九年河内屋喜兵 衛刊、同宝永六年増修丸屋源兵衛刊)など、多くが『博書籍目録大 作刊正徳五年修、丸屋源兵衛刊)など、多くが『博書籍目録大 の文十年刊)と同じ排列で掲出している。よって、以下の記 の文十年刊)と同じ排列で掲出している。よって、以下の記 の文十年刊)と同じ排列で掲出することにする。

とおりである。 を含めた六家集版本の書誌を記すと、次の

版木の順序を示す附号が印されている。行二十七字内外。版心は印刷されておらず、綴じ代の部分に、三十冊。無辺無界。印面高さ約二十一糎。毎半葉十二行。毎

家集第一冊にのみ付されている。 隆卿」・「山家幾/西行上人」の如く印す。但し、作者名は、各 /慈鎮和尚」・「拾遺幾/定家卿」・「拾遺員外幾」・「壬二幾/家 印刷題簽「長秋幾/俊成卿」・「月清幾/後京極殿」・「拾玉幾

如き跋文が刻されている。

一氏者四道家流共居其一勉哉/復古之業有待焉遂書/慶安元

年戊子/戸部法印道春(印)

ち、「上ノ下」・「中ノ下」・「下ノ下」の場合は、書名を含め小ち、「上ノ下」・「中ノ下」・「治玉集巻第一(~七)」(三冊)・「拾遺愚草上(拾上ノ下、中、中ノ下、下、下ノ下」(六冊)・「拾遺愚草上(拾上ノ下、中、中ノ下、下、下ノ下」(六冊)・「拾遺愚草上(拾上ノ下、中、中ノ下、下、下ノ下」(六冊)・「拾遺愚草上(拾上ノ下、中、中ノ下、下、下ノ下」(六冊)・「拾遺愚草上(十二)・「大部史生秋篠月清集家集第一冊にのみ付されている。

字に作っている。

印と思われる、印面の鮮明なものである。
この三十冊本は、版心が印刷されていないことが特徴で、『

があるのではなかろうか。

佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵本は、三十一冊本であるを指すのか、不審に思われるのである。恐らく、同本の記載に誤りである。従って実数はやはり三十冊であり、すると、『瀬書籍目である。従って実数はやはり三十冊であり、すると、『瀬書籍目である。だって実数はやはり三十冊であり、すると、『瀬書籍目である。だって実数は、三十一冊本であるがあるのではなかろうか。

集『拾玉集』巻末には、右の跋文を記した次葉に、さらに次の線三年開板といわれてきたが、前掲佐賀大学附属図書館蔵六家年紀の「文禄第三云々」を刊記と誤ったためであろう、長く元也/文禄第三暦林鐘初二/丹山隠士玄旨在判」とある本奥書の仮申出青門御本五冊再三/比校而正鳥焉之差誤尤可/為證本者仮申出青門御本五冊再三/比校而正鳥焉之差誤尤可/為證本者ところで、従来六家集版本の刊年に関しては、『拾玉集』巻ところで、従来六家集版本の刊年に関しては、『拾玉集』巻

元年を遡らぬものであろうことが推定されるのである。れる。が、ともあれこれによって、六家集版本の成立が、慶安った数本の三十冊本六家集の中でも、佐賀大学蔵本のみにみら文の末尾部分が誤綴されたものである。この混入は、管見に入これは、慶安元年版『延喜式』に付された道春(林羅山)の跋

六家集三十冊本中の『山家集下ノ下』巻末に、次の如き注目す 春の跋文の混入した六家集もある程度行われたのであろうか。 年版『延喜式』跋文と同一のものを略記しているのである。道 している。すなわち、佐賀大学附属図書館本にみられる慶安元 とそれぞれの冊数を記し、さらにその後に、「私云拾玉集末にノ 一氏四家……/……/慶安元……/戸部法印道春(印)」 と記 一・二〕の『壬二集』下巻巻末には、墨筆にて、六家集の書名 しかし、これよりもさらに信ずべき資料がある。神宮文庫蔵

旦/洛下書堂風月宗左衛門昌重 六家集全三十冊奉納于/豊宮崎文庫/慶安三庚寅夏五月吉 て調査させていただいた折、見出した。

いる。

べき奉納識語が存することを、昭和五十三年十月の同文庫に於

ことを知るのである。 版本の刊行が慶安三年頃であり、発行元が風月宗左衛門である 肆より豊宮崎文庫に奉納されたものである。 当時の 習慣とし 本であることは明らかである。すなわち、慶安三年五月に、 首葉に「宮崎文庫」の朱印を有することにより、宮崎文庫旧蔵 経ぬ時点で奉納されたものと思われるが、そうすると、六家集 て、書肆が伊勢神宮に奉納するということがあり、刊行後、程

〔哥・二〇・伍・二九三〕がある。 右の三十冊本を、二十冊に合冊したものに、三手文庫蔵版本

慶安〕刊後修本

十八冊に合冊されることになる。先に引用した、『禰書籍目録』 三十冊本六家集版本は、広く流布をみないまま、時を隔てず

> 版本の殆んど―『山家集』について言えば、単独で蔵されるも 年には十八冊に合冊されていたのである。現在属目する六家集 十八冊本である。その分巻の次第は、次の如くである。 のも含めると、全国で百本以上にも上るかと思われるが一は (寛文十年刊)には、「六家集 十八冊」とあり、遅くも寛文十 長秋詠草三巻二冊、式部史生秋篠月清集四巻二冊、拾玉集七

合冊に際しては、版心に略書名、巻次数、下方に丁附を印して 三巻三冊、山家和歌集二巻二冊。

巻五冊、拾遺愚草三巻三冊、拾遺愚草員外二巻一冊、壬二集

「玉三 初(→卅六)」、拾玉四、「玉四 初(→五十八)」、拾 二、「玉一 初(~卅七)」「玉二 初(~卅九)」、拾玉三、 四、「月三 初(~廿六)」「月四 初(~廿三終)」、 二、「月一 初(~二十九)」「月二 初(~廿五)」、月清三 秋下、「長下 初(~三九終)」―五、又五と重出―、月清

二中、「壬中 初 (~七十七)」、壬二下、「壬下 初 (~卅二 初(~六十八)」、拾遺員外上下、「員上 初(~卅五)」「員 九十三)」、拾遺中、「拾中 初 (~四十)」、拾遺下、「拾下 四十四)」、「玉七 初(~四十三)」、拾遺上、「拾上 初(~ 玉五、「玉五 初(~六十二)」、拾玉六七終、「玉六 初(~ 終)」、山家上、「山上 初(~四十八)」、山家下、「山下 初(~卅二終)」、壬二上、「壬上 初(~七十七)」、壬

長秋上中、「長上 初(~十六)」「長中 初(~十八)」、長 次に、合冊された外題によって、各冊の丁附を掲出する。

(~七十一)」

〔慶安〕刊後修、京・風月荘左衛門印

を示した後、上村・吉田・風月の出版元名を印している。 丸屋源兵衛刊)などには、「六家集」の項に、十八という冊数丸屋源兵衛刊)などには、「六家集」の項に、十八という冊数丸屋源兵衛刊)などには、「六家集」 (元禄九年河内屋喜兵衛刊、同宝永六年増修第に印面の磨滅した、不鮮明なものが出回るようになった。 この六家集は、需要が多かったのであろう、版を重ねて、次この六家集は、需要が多かったのであろう、版を重ねて、次

二条通衣棚/京都書肆/風月荘左衛門

十八冊本六家集の中には、次の如き奥付を有するものがあ

る。

類で同書が最後に排列されていることによるものであろう。あろうし、『山家集』巻末に付せられているのは、多くの目録書にのみ、玄旨の奥書が印されていることと、関係があるのでの巻末にみられる。『拾玉集』巻末に付せられているのは、同い巻末に、安備の東書が印されていることと、関係があるのでの巻末にみられる。『拾玉集』を表に付せられているのは、同い巻末に、内閣文庫蔵六家集版本〔四・282〕や、神宮文庫蔵六家集けは、内閣文庫蔵六家集版本〔四・282〕や、神宮文庫蔵六家集上述の三書肆のうち、風月を代表としたものであろう。この奥上述の三書肆のうち、風月を代表としたものであろう。この奥上述の三書肆のうち、風月を代表としたものであろう。この奥

さて、次に六家集中の『山家集』のみについてとりあげるこ家集』単行の後刷本が印行されたか、とも思われる。も、同一の奥付を有するものがある例をみると、あるいは「山も、同一の奥付を有するものがある例をみると、あるいは「山館蔵山家集〔3・サ・4〕など、単独で蔵される『山家集』に一方、神宮文庫蔵山家集〔三・199・1〕、京都大学附属図書

歌数一五六九首、うち、び恋、下巻が雑となっている。ススン(ハン)歌以下が下巻である。とにする。まず『山家集』各巻の内容をみると、上巻が四季及

寄紅葉恋

紅葉の色の袖にまかへる(砂)

て、西行の歌の実数は、版本で一四九一首である。28(28)歌は、版本では詞書を欠き、他人の歌であるにもかかなく、重出しない。贈答歌における他人の詠七十七首。但し、の歌は、夘(槹の次)に重出する。陽明文庫本では、夘の方が

版本独自歌、陽明本独自歌と呼ぶことにする。次にその版本独文庫本にあって版本に欠く歌は六首である。それぞれを以下、版本重出歌を含むから、実数は二十二首であるが一、逆に陽明あって陽明文庫本に欠く歌は二十三首―但し、この中には前掲版本所載歌と、陽明文庫本のそれを比較してみると、版本に

5とけ初るはつ若水の気色にて〔立春の朝よみける〕

自歌を掲出する。

春立ことのくまれぬるかな(4の次)

はるきて猶雪

!!かすめともなき雪の下水(9の次)

37香にそまつ心しめをく梅のはな

色はあたにも散ぬへけれは(34の次)

179山川のなみにまかへる卯花を

立かへりてや人はおるらん(16の次)

19ほとゝきすきく折にこそ夏山の

青はゝ花におとらさりけれ(四の次)

(五月五日山寺へ人のけふいる物なれはとてさうふをつか はしたりける返ことに〕

211五月雨の軒の雫に玉かけて

やとをかされるあやめ草かな(20の次) [ある所にて五月雨の哥十五首よみ侍し人にかはりて]

20五月雨はいさら小川の橋もなし

いつくともなくみほになかれて(25の次)

37月すみてなきたる海の面かな

空の波さへ立もかゝらて(引の次) 月前に友にあふといふことを

20うれしきは君にあふへきちきりありて

月に心のさそはれにけり

鉛ひとりねのねさめのとこのさむしろに [虫のうたよみ侍けるに]

涙もよほすきりく、す哉(44の次)

切物おもふねさめとふらふきりくす [虫のうたよみ侍けるに

人よりもけに露けかるらん (50の次)

[寄紅葉恋]

紅葉の色の袖にまかへる(細の次)

〔長楽寺にて夜紅葉を思ふと云事を人々よみけるに〕

50神無月木葉の落るたひことに 心うかるゝみ山へのさと(卵の次)

夜初雪

37月出る軒にもあらぬ山のはの

しらむもしるしよはの白雪(55の次)

54あらち山さかしくくたるたにもなく

雪のうたよみけるに

かしきの道をつくるしら雪(58の次)

[としのくれにあかたより都なる人のもとへ申つかはしけ

59日さとに家ゐをせすはみましやは

紅ふかき秋のこすゑを(55の次)

〔夢会恋〕

奶あふことを夢也けりと思わく 心の今朝はうらめしきかな(タヨの次)

父のはかなくなりにけるそとはをみて帰りける人に

805なきあとをそとはかりみて帰るらん 人の心を思ひこそやれ(アタの次)

1064

〔題しらす〕

89杣くたすまくにかおくの河上に たつきうつへしこけさ浪よる (94の次)

〔題しらす〕

認錦をはいくのへこゆるからひつに おさめて秋は行にか有らん(図の次)

IIIあくかれしあまのかはらと聞からに らんといひけんこと思ひ出されてよみける 天王寺へまいりけるにかた野なと申渡り過てみはるかさ れたる所の侍けるを問けれはあまの川と申をきゝて宿か

昔の波の袖にかゝれる(196の次)

たゝきて道を行といふことを

松の木のまよりわつかに月のかけろひけるをみて月をい

166くみてこそ心すむらめしつのめか いたゝく水にやとる月影(三の次)

神楽に星を

沼みけて出るみ山もみねのあか星は 月待えたる心ちこそすれ(コスの次)

九番左に自撰している歌であることが注意される。 右のうち、113(160の次)歌は、西行が『御裳濯河歌合』二十

> 歌あるいは詞書である。又20(回)には、イの記号の付されて 文庫本に一致する。版本成立の時点で、すでに陽明本系本文と 的にあらわれている点が注意される。右のイ本は、すべて陽明 いない校合注がある。校合注の施されている箇所が、やや集中 接触している事実を知ることができる。 1048 1203 1186 1239 (四)、133 (320) [二カ所]、1359 (34) の各

出する。(
)内に誤りを正した本文を、

「
)内に、版本 次に本文を見ると、版本には誤りが多い。次に顕著な例を掲

と同じ誤りを犯している伝本を、略称をもって掲げる。 志甲・志乙・志丙・書甲・静・穂乙・大・東甲〕、23(28)第 73 (71) 第五句 なからなん (ひるなからなん) 〔長・国・

の比(五月雨の比)〔長・志甲・志乙・書甲〕、49(42)詞書 五句 五月の比(五月雨の比)[長]、25(20)第五句

第二句(むつことつわて(むつことつきて)〔長・国・志乙・ 書甲・静・神・米・穂甲・穂乙・大・東甲・東乙〕、43(42)

志丙・志丁・静・穂乙・大〕、82(43)初句 いとゝ山(いと

鴈
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に
 に

神・米・穂乙・大〕、73(78)第四句 か山)〔長・国・志甲・志乙・志丙・志丁・都・ 書甲・ 静・ いとふにたにみも(い

書甲・静・神・米・東甲]、四(タタ)第二句 そはたつ木にを (堀川の局)〔長・国・志丙・志丁・書甲・静・神〕、% とふにたにも)〔長・志丙・書甲〕、アタ3(アア)詞書 堀川の房 うらつふす (うつらふす) (長・国・志丙・志丁・都

(そはのたつ木に)〔長・国・志丙・志丁・書甲・ 静・ 神・

て (いひちらさせて) [長・志丙・志丁・書甲・静・神・東東 (いひちらさせて) [長・国・志丙・書甲・静・神・悪 (長・国・書甲)、(22) 第四句 みさほをける (みさほ成ける) (長・国・書甲)、(32) 第四句 人めも也しらぬ (人めもしらぬ) [長・国・書甲]、(33) 第四句 たこもりなんと (かきぬ) [長・国・書甲・東乙]、(44) 第五句 いひちらせ 中・穏乙・大・東甲・東乙]、(44) 第五句 いひちらせ 中・穏乙・大・東甲)、(183) 第四句 きこもりなんと (かきぬ) [長・国・志丙・都・書甲・神・米・恵 (長・国・本) (42) 第四句 きこもりなんと (かきぬ) (長・国・志丙・都・神・東 (いひちらさせて) (長・志丙・志丁・書甲・静・神・東 (いひちらさせて) (長・志丙・志丁・書甲・静・神・東 (大・徳乙・大・東甲)、(183) 第四句 みさほをける (いひちらさせて) (長・志丙・志丁・書甲・静・神・東 (いひちらさせて) (長・志丙・志丁・書甲・静・神・東 (いひちらさせて) (長・志丙・志丁・書甲・静・神・東 (いひちらさせて) (長・国・大・東甲) (いひちらさせて) (長・志丙・志丁・書甲・静・神・東 (いひちんと) (いひちらせて) (は、) (いひちらせて) (いちらせて) (いちらせて) (いちらせて) (いちらせて) (いちらせて) (いちらせて) (いちらせて) (いきせて) (いちらせて) (いちもししらなんと) (しらせて) (いちもしちはて) (いちもしちはて) (いちもした) (いちもした) (いちもした) (いちもした) (いちもした) (いもした) (いちもした) (いち

作っているのも、同様の理由に基づくものであろう。 (松)では、「支」の草仮名「む」に見え、155(似)では、「申」の一部が欠けて、「し」になっている。 多くの伝本が「わ」「し」に作っているが、そになっている。 多くの伝本が「わ」「し」に作っているが、そになっている。 多くの伝本が「わ」「し」に作っているが、そになっている。 多くの伝本が「わ」「し」に作っているが、そになっているのも、同様の理由に基づくものであろう。

東乙・三を除く諸本には、この内題が記されている。 東乙に残されている。そして、版本系諸本のうち、穂乙・大・東甲・歌集下ノ下」とされたが、合冊された二冊本にも、この内題はまた、版本が三分冊された際に、三(95)歌以下が「山家和

ナ、女丁~CII(85)从では己~C~ら。 は、この内題はないが、前歌との間に、一丁分に近い余白を設

くするものに、長・国・志甲・志丁・都・神の各本があり、用書写形態をみると、行格を版本と全く、あるいは殆んど等しけ、改丁して…(195)以下を記している。

本は、版本に特徴的にみられる誤りと同じ誤りも犯している版本による写本であろうと思われる。東北大学附属図書館蔵乙以上のような点からみて、本系類に属する伝本の殆んどは、

甲・志丙・志丁・都・書甲・静・神の各本がある。

字を版本と全く、あるいは概ね等しくするものに、長・国・志

るような例もある。おそらく他本によって、誤りを正している誤っている年号を、本書のみ「仁安二年」と正しく記述してい(ハタン) 詞書にみられるように「仁和二年」と版本系諸本すべてが、その数は他の諸本に比べて、かなり少ない。中には、III

白、穂甲は「いひ」以下を空白とす〕

甲・国は「ひちらせて」、米は「いひ」と「せて」 の間を空

注目すべき本文を有している。りを犯すこと少なく、版本系諸本の中では、版本を遡り得る、りを犯すこと少なく、版本系諸本の中では、版本を遡り得る、そうした中で、三手文庫蔵本は、版本に特徴的にみられる誤

のであろう。

は殆んど顧みられないのが現状である。 全集』の底本とされて以来、陽明文庫本が専ら用いられ、版本的であった。しかるに、伊藤嘉夫氏により、陽明文庫蔵本が、版本の不備を補うところ少なくない善写本として、『西行ものであった。しかるに、伊藤嘉夫氏により、陽明文庫蔵本が、版本は、慶安頃に六家集として刊行されて大いに流布し、明版本は、慶安頃に六家集として刊行されて大いに流布し、明

しかしながら、これを三手文庫蔵本によってみると、版本系

てみると、必ずしも末流の相悪本文とは思われないのである。 本文の状況はかなり異なる様相を示し、又版本系本文を調査し

かでも宮本家本『山家心中集』は、西行歌集の中では、最古の 『山家集』より抄出された歌集に『山家心中集』がある。

できない。しかし、西行とほぼ同時代の人の書写したものであ のうちの最初の筆は「西行自筆とも俊成筆とも断定することは 所伝を有する一本である。未見であるが全体三筆より成り、そ

保田淳氏 日本古典文学会)といわれて、本文の性格を考える ることは疑いない。」(宮本長則氏蔵本『山家心中集』解題、

かを調べてみると、それぞれに一致する詞句は、 本系で本文が異る場合に、宮本家本の本文がいずれに一致する 場合、最も大きな指標となるものである。いま、版本系と陽明 数十例ずつあ

り、ほぼ等しい割合を示している。次に、その顕著な例を掲げ

陽明本が宮本家本本

を掲げる。

56(55)詞書に「山家枯草といふことを覚雅僧都の坊に

文にそれぞれ一致する例である。 る。Aは、版本が宮本家本本文に、Bは、

本

なくやちる なくやちり 陽明本 山家心中集宮 本 家 本 なくやちる

68(83)第五句 385(379)第二句 96(93)初 8(83)第五句 らん 我なみた 所えかほに 老つとに わかおもひ 心えかほに おもひいてに なん をいつとに らん わかなみた ところえかほに

1002

(987)初

句

空晴る かな

空はたゝ

そらはるる

かな

В

12(10)第二句

谷の下水

谷のほそみつ

たにのほそみつ

720(75)第二句 46(48)第二句 さのみぬる へき へき つゆけかる とふ人のな へき つゆけかる

なとゝふ人 とふ人のな

104(028)第二句 あたになり あたにやれ

あたにやれ

1046(1030)第二句 みしよにも みし世にも

> みしよにも ゆく

すなわち、版本系本文も又、 西行と同時代まで遡り得る本文 にす にす

を有しているのである。 さて次に、版本系本文で、陽明本系本文の不備を補い得る例

花・千載各集の作者でもある。待賢門院のゆかりによる交友で 覚雅は顕房の息、 神祗伯顕仲の弟で、 東大寺の僧、 り、ここは版本によるべきであろう。 あろうが、 覚雅僧都との交友を示す歌は、 て人々よみけるに」とある。陽明本系諸本「覚範」とあるが、 他にも二首ほどあ

84 (89) 詞書「方便品深着於五欲の文を_

陽明本系諸本は、 906 (82) 詞書「神力品於我滅度後の文を」 894 (89)「方便品」、96(82)「於我滅度後の

文を」の部分を欠く。(但し、 版本系本文に拠るとみられる多

じ本文を有する。) 本来存したものが脱落したものであろう。和文庫本で84、9%について、又筑波大本で9%について版本と同

又、詞書の有無、位置についても、

陽明本系諸本は欠いている。(2)版本では17(17)歌の前にある詞書「三月つ晦日に」を、とある詞書が、陽明本系諸本では65(67)の前に位置している。とある詞書が、陽明本系諸本では65(67)歌の前に「花のうたあまたよみけるに」

を」を陽明本系諸本は欠いている。 3) 版本では24(33)歌の前にある詞書「行路夏といふこと

- 右の如き例についても、歌の内容と併せ検討してみると、版本系諸本では50(49)の前に位置している。(4)版本では50(49)の前にある詞書「暁落葉」は、陽明本
- る版本系本文との接触で、陽明本の誤りがしばしば正されてい類本C、第三類本などに顕著にみられる如く、転写過程に於けのであるが、注意しなければならないのは、第一類本C、第二の方がそれぞれ適切である。

詞句の例は、かなり多数にのぼるのである。

ることである。陽明本に限ってみれば、版本によって正される

多の各本は、

している。恐らく、注記のないこれらの諸本も、本来存したも

前歌との間に、余白を設けて、四(四)から改丁

四本とも、四(四)より改丁箇所に当っており、

殊に松・京研

の各本と、第四類本の多には、この注記はみられないが、以上

ば らら。 ところで、陽明本系諸本にみられる奥書の中に、次の如き記

以上哥数千五百五十三首載がある。

右に言う「千五百五十三首」は、陽明本の歌数であり(一首相本云一千五百七十二首云々

加えると、この数に近いものとなる。 次(ハル)「とりへのや……」や、百首歌に不足する一首などをの歌数は、一五六九首であるが、祖本に存したと思われる別の違するが)、「一千五百七十二首」は、版本のそれに近い。版本

二首佗人ノ詠/下巻八百四十八首此中七十三首ハ寂然等ノ哥/れている。「山家集千五百七十一首斗/上巻七百二十三首、此中因みに、日本女子大学蔵本の奥書には、次の如き付箋が施さ

下帖」と作る。同本の誤写であろう。)第一類本の学・松・京研京都立中央図書館蔵本に、校本たる書陵部蔵乙本と同一の一本による奥書が転写されている以外、奥書の類はみられないが、当時はかかる奥書を有する版本系の写本が存したのであろう。当時はかかる奥書を有する版本系の写本が存したのであろう。当時はかかる奥書を有する版本系の写本が存したのであろう。当時はかかる奥書を有する版本系の写本が存したのであろう。当時はかかる奥書を指している。現存の版本系諸本には、東らかに版本系。の本を指している。現存の版本系諸本には、東らかに版本系の本を指している。現存の版本系諸本には、東らかに版本系の本を指している。現存の版本系統立と、関係の表述を表述といる。

-- 384 --

版本系伝本との接触を示すものとして注目されるのである。 れらの諸本に多量の版本系本文の流入がみられることと併せ、 727 (712)の前にわざわざ余白を設けて改丁していることは、こ 以下を下帖とするのは、版本である。松・京研・多の三本が、 のが、転写の過程で脱落したものではなかろうか。この77(712 本と接触していたという事実は、陽明文庫本と版本の成立過程 を考える場合、注意しなければならないであろう。 ともあれ、陽明文庫本が書写された時点で、すでに版本系伝

歌数、版本と同じ一五六九首。 見消ち少々、行格・用字を同じくする版本の忠実なる臨写本。 歌集」と墨書。内題「山家和歌集上(下)」。印記「諫早文庫」。 縹色無地表紙、二十七・五×一九・二糎。 字面高さ約二十 毎半葉十二行。墨付百十九丁。外題、表紙中央に「山家和 長崎県立長崎図書館蔵〔江戸後期〕写 — 册

しくする。

行格を同じくし、 用字もほぼ同じで ある。 歌数一五六八首。 九丁。題簽、元表紙左肩に白地裂短冊を貼付「山家集 全」と 糎。料紙、斐紙。字面高さ約十三糎。毎半葉十二行。墨付百十 草色無地裂元表紙。 茶色無地改装表紙、 十六・六×十一・五 (44)歌を書落して、同筆にて書入れている。 内題 「山家和哥集上(下)」印記 「醍醐蔵書」 「忠順珍 国立国会図書館蔵〔江戸後期〕写 見消ち(墨)、イ本書入れ(朱)等僅かあり。 — 册

> の順になっている。ともに本書のみにみられる排列である。 り、1379 (136) と1380 (136) は、順序が逆で、1380 (136)・1379 (136) 991 (976)・92 (977)・93 (978)・98 (974の次)・94 (979) の順であ 排列については、二箇所に異 同が みられる。 すなわち、 (74の次) は、93(78)の次にあって、98(74)・99(75)・

989

志香須賀文庫蔵 〔江戸末期〕 写 (存上巻)

に寄せて「山家集」上」と墨書。内題「山家和歌集上」。歌数 十一糎。毎半葉十二行。墨付四十八丁。外題、表紙中央やや左 は版本上巻と同じ七二六首。版本と行格が同じ。用字をほぼ等 本文共紙表紙、二十四・五×十七・三糎。仮綴。字面高さ約二 册

志香須賀文庫蔵 〔江戸後期〕 写 (存上巻)

₩

糎。毎半葉十三行。墨付四十四丁。外題、表紙中央に「山家和 614 「藤田与民蔵」とあり。見消ち、書入れ僅かにあり。 本文共紙表紙、二十三·五×十七糎。 (59) の各歌及び下巻を欠く。歌数七二四首。 西行」と墨書。 内題 「山家和歌集上」 裏表紙見返しに 仮綴。 字面高さ約二十 397

浅黄色無地表紙、 二十六・五×一九・二糎。 志香須賀文庫蔵〔江戸中期〕 写 二冊 字面高さ約二十 丙本

本書は75(73)、166(144)、115(186)の三首を欠く。又、48(年)」と墨書。内題「山家和歌集上(下)」。表紙見返に「上下(坤)」と墨書。内題「山家和歌集上(下)」。表紙見返に「上下(坤)」と墨書。内題「山家和歌集上(下)」。表紙見返に「上下(坤)」と墨書。の題「山家和歌集)の三首を欠く。又、48年、大五糎。毎半葉十行。墨付、乾冊五十六丁、坤冊八十二丁。題

位置であり、書落としに気付いて、直ちに書入れたものであろる。この位置は、巻末百首の「月」題で十首並んでいる最後の排列に関しては、483(475)が500(42)の次に書写されてい

数は一五六三首、書入れ歌五首である。

詞書については、歌の末尾に「イ」と注記している。)写本であることは間違いなかろうと思われる。(因みに 郷

488

巻末には「校本云」として書陵部蔵乙本と同一の奥書を記し

同じである。歌数、版本と同じ一五六九首。見消ち、書入れ等の書写であることを知る。版本と行格を等しくし、用字もほぼとあって《明暦三年の書写、すなわち、版本成立後程経ぬ時期

僅かにあり。

内題「山家和歌集上(下)」。印記「反町文庫」。丁。 題簽、 表紙左肩に短冊を貼付「山家集上(下)」と墨書。さ約二十二糎。毎半葉十二行。墨付上冊四十八丁、下冊七十二、淡黄蘗地草花文様金繡裂表紙、二十七・二×二十糎。 字面高東京都立中央図書館蔵〔江戸中期〕写 二冊

本書は、行格、用字とも版本にほぼ同じくする。 ただ不審

行として版本に合わせているところなどからみて、版本系の転行として版本に合わせているところなどからみて、版本系の転にいかにして……」などが、本書には本行に存することである。が校本として用いられ、かなり綿密な校合注が付されているが、右の如き現象を生じた理由は、依拠本における校合注が、が、右の如き現象を生じた理由は、依拠本における校合注が、が、右の如き現象を生じた理由は、依拠本における校合注が、が、右の如き現象を生じた理由は、依拠本における校合注が、が、右の如き現象を生じた理由は、依拠本における校合注が、が、右の如き現象を生じた理由は、依拠本における校合注が、からかに、版本系諸本にほぼ一致して欠く280(281)詞書「坊なるなのは、版本系諸本にほぼ一致して欠く281(281)詞書「坊なるなのは、版本系諸本にほぼ一致して欠く281(281)詞書「坊なるなのは、版本系諸本にほぼ一致して欠く281(281)詞書「坊なるなのは、版本系諸本にほぼ一致して欠く281(281)詞書「坊なるなのは、版本系諸本にほぼ一致して欠く281(281)

記しているほか、同本によって集付をしている。ている。又、版本に存し、同本にみられぬ歌を「校本旡」と注

(20)、79の次(76)の二首の書入れはない。おそらく、見落と前述した如く、91の次(88)歌は本行に存する。 残る 23 の 次次(14)、152の次(51)の三首を行間に細字で補入している。さて、本書は陽明本独自歌六首のうち、13の次(11)、151の

即ち陽明本系の排列によって書入れ、重出する結果となってい即ち陽明本系の排列によって書入れ、重出する結果となっていて、86(部)を66(部)の次に、14(13)を15(13)の次に、したものであろう。

『函架番号 一五一・四一八〕書陵部蔵〔江戸中期〕写 二冊 甲本

夫木抄と校合している。 大木抄と校合している。 大木抄と校合している。 大木抄と校合している。 大木抄と校合している。 大木がと校合している。 大木がと校合している。

1202 (185) 詞書までを欠く。目移りによる誤写であろう。以上に計七首を脱落している。又202 (184) は詞書はあるが、歌及び計七首を脱落している。又202 (184) は詞書はあるが、歌及び

静嘉堂文庫蔵〔江戸後期〕写 二冊

字を同じくしている。

じくする。歌数は⑶(ভ)を欠いて、一五六八首である。 見消ちがある。本書も、版本と行格は異なるが用字を殆んど同 居上に別筆の書入れがあり、本文中にもそれと同筆の書入れ、 村「山家和歌集 乾(坤)」と墨書。内題「山家和歌集上(下)」。 乾冊四十六丁、坤冊六十五丁。題簽、表紙左肩に白紙短冊を貼 乾冊四十六丁、坤冊六十五丁。題簽、表紙左肩に白紙短冊を貼 乾冊四十六丁、坤冊六十五丁。題簽、表紙左肩に白紙短冊を貼 乾冊四十六丁、坤冊六十五丁。題簽、表紙左肩に白紙短冊を貼

歌数一五六八首。 川(昭) 歌を書落し、朱筆にて書入れてい

神作光一氏蔵嘉永七年蒼翠館主人筆本

へ、後から補ったものであろう。 く最初の一字が磨滅して読めぬ為に空白にしておい たところる。はじめから一首分の余白を設けているが、後修本でおそら

#列に関しては、次の箇所が版本と異っている。 → 83(8) → #列に関しては、次の箇所が版本と異っている。 → 83(8) → 13(12)・13(13)・17(12)・13(12)・12(12)・12(17)・13(12)・13(13)・17(12)・13(12)・12(17)・13(12)・13(13)・17(12)・13(13)、 = 20(15の次) → 20(21)の次、の次、四 37(35) → 36(355) の次、田 36(55) → 37(57) の次、円 1500 → 12(14) の次、円 1500 → 12(14) → 12

き、直ちに書入れたものかとも思われる。

穂久邇文庫蔵〔江戸中期〕写(存下巻) 二冊 甲本

は、)の「己」ではない「下こった」の「山家和歌集下(下ノ肩に「山家集中(下)」と墨書。 内題 「山家和歌集下(下ノ毎半葉八行。墨付中冊五十一丁、下冊五十五丁。外題、表紙左の「大葉色無地表紙、二十・二×十四糎。字面高さ約十七・五糎。

本書は、分冊の次第からみて、三十冊本六家集版本による転下)」。印記「二条家図書記」。

写本であると思われる。見消ちが少々ある。

いる。従って歌数は、中冊三七八首、下冊四五六首、計八三四一丁分六首、及び下冊55(53)、156(54)、156(55)の各歌を欠いて本書は上巻を欠くほか、下巻の中冊73(72)~14(72)歌までの

穂久邇文庫蔵〔江戸中期〕写 二冊 乙本

首である。

家和謌集上(下)」と墨書。内題「山家和歌集上(下)」。 冊全四折八十五丁。題簽、表紙左肩に亀甲文様短冊を貼付「山子。字面高さ約十九糎。毎半葉十行。墨付全三折五十五丁、下て描ける表紙、二十四・三×十六・七糎。 美麗本。 料紙、鳥のて描ける表紙、二十四・三×十六・七糎。 美麗本。 料紙、鳥の後葉装。利休鼠色地に桜花・葉・波形等を白・洗朱・金泥に 級葉装。利休鼠色地に桜花・葉・波形等を白・洗朱・金泥に

四五首。この欠落箇所は、綴葉装の折の最も内側、ちょうど二丁歌数は上巻38(34)より44(38) 詞書まで二四首を欠いて一五

丁第一行目に書写されており、改丁の際に同歌の 脱落に 気づに本書に独自にみられる排列である。⑽(タタ) については、 改

(タタ)→10(100)の次、□ 194(17)→17(180)の次、であるが、とも

本書には、二箇所に排列の異同がみられる。 すなわち 🖂 🕬

の誤りを犯している点も多いことから、全体としてみると、版れらには誤写に基づくと思われるものが多く、一方、版本特有れらには誤写に基づくと思われるものが多く、一方、版本特有分に当っており、脱落によるものであることは明らかである。

本による写本であると思われる。

脱落箇所、排列における異同、異文の状況など、次述する大り、いずれも上巻である。 □ 57(50)・57(59)、四 70(62)→71(68)の次、の各箇所であ

倉精神文化研究所本に同じくする。

淡縹色地、白・桃色等彩色牡丹花模様裂表紙、二十六・五×十大倉精神文化研究所蔵〔江戸後期〕写 一冊

が親色地 白・材色等彩色地戸柑橘樹多妻総 二十プ・五×十次親色地 白・材色等彩色地片、「山家和謌集 全」と墨書。に銀箔散らし厚手白紙短冊を貼付、「山家和謌集 全」と墨書。に銀箔散らし厚手白紙短冊を貼付、「山家和謌集 全」と墨書。に銀箔散らし厚手白紙短冊を貼付、「山家和歌集上(下)」、「山家和歌集上(下)」、「山家和歌集上(下)」、「山家和歌集上(下)」、「山家和歌集)」、「山家和歌集)」、「山家和歌集)」、「山家和歌集)」、「山家和歌集)」、「山家和歌集)」、「山家和歌集)」、「山家和歌集)

東北大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写 一冊 甲本

(下)」。(下)」。最書。 同右下方に「松岡蔵」と墨書。 内題「山家和歌集」と墨書。 同右下方に「松岡蔵」と墨書。 内題「山家和歌集」全」十二行。墨付百十五丁。外題、表紙左肩に「山家和歌集」全」、表表表表、二十三・六×十七糎。字面高さ十九・七糎。毎半葉

難波わたりに年超に侍けるに本書はきわめて特異な形態を有する伝本である。即ち、

なにはの浦をかすみこめけり(8) 9いつしかも春きにけりと津の国の 黄泡オナートを表し作りる

である。いま、次に、巻頭部分の歌の排列を、歌番号のみで掲を巻頭歌とし、上巻については類纂を試みて再編集しているの

出する。

9(8)、1(1)、2(2)、3(3)、4(4)、5(4の次)、6 (5)、8(7)、11(9の次)、16(14)、17(15)、18(16)、7(6)、 10(9)、15(15)、14(12)、15(13)、26(24)、29(77)、30(28)、 19(17)、21(19)

かたらひ過るみやまへの里友もなしたゝなれのみそ子規また夏あさきうのはなの空また夏あさきのはなの空

名のりてすくる郭公かな ときしもあれ心をすますたそかれに

とまりはかりのもろこゑもかな きく人のあかぬ心にほとゝきす

過きぬるたゝ一こゑのなこりには

あかぬこゝろか山ほとゝきす

きしながらの編集作業の中で混入したものではなかろうか。 いかなる事情によるものか未詳であるが、おそらく別紙に抜書 おそらく同様の理由によってであろう、22(19)の詞書も山家

月四日和歌所雨中郭公」とする誤謬を犯している。 集版本で「雨中時鳥」とあるものが、本書では「承久二年閏四

脱落歌も大量に存する。 上巻に 12(10)、 13(11)、 25(23)、

28 (26)、156(15)、29(26)、27(26)、27(26)、39(392)、41(434)、

く。これも再編集作業の途中で欠落したものであろう。以上に (52)、58(55)、58(55の次)の十九首、下巻に55(19)の一首を欠 48(47)、47(48の次)、48(48)、55(44)、56(45)、51(50)、53

うち『拾玉集』よりの混入歌五首、重出歌十二首である。 よって歌数は、上巻七二四首、下巻八四二首、計一五六六首、

下巻の排列は版本どおりであるが、一カ所、48(41)・48(40)

版本と同系であるが、独自の異文を有する。

の歌順が本書独自のものである。

東北大学附属図書館狩野文庫蔵〔江戸後期〕写

簽を貼付、「山家集」と墨書。 内題「山家和歌集上(下)」。 元表紙左肩に「山家集」と墨書。改装表紙左肩に子持枠付刷題 糎。字面高さ約十九・七糎。毎半葉十行。墨付百四十丁。外題 香色無地元表紙、濃褐色無地改装表紙、二十三・八×十六・九

歌は、初句のみあって、すぐ36(30)歌の二句目以下に続いてし の次)、178(181)、178(181)、179(181)の各歌を欠く。 さらに 36(39) 本書は、9(8)~10(97)、39(38)、49(42)、58(55)、59(55

まっている。すなわち、

あまの原月の比にし成ぬはれ

秋はよるなき心地社すれ

る。以上によって、歌数は版本より十七首少ない一五五二首で の如くであって、目移りによる誤写であることは明らかであ

ある。 排列は130(22)・130(29)・130(29)となっている箇所が版本と異

る。

る。版本には十二カ所にイ本書入れが存するが、本書にはみら 「新古今」等の集付が僅かにある。 眉上に参考歌、 書入れがあ れない。又、版本に比べ、誤りはかなり少ない。 セル文学博士狩野享吉氏旧蔵書」との朱印がある。又「月詣 本書には、第一丁オ右下に「荒井泰淐氏ノ寄附金ヲ以テ購入

十三糎。每半葉十二行。墨付百十一丁。 香色無地表紙、 二十六・九×十九・五糎。 字 面 髙 さ 約 二 三手文庫蔵 〔江戸中期〕写

₩

外題、

表紙中央に

一冊 乙本

は坂本と司じ一五六九 首で ある。 印記 「俘雪」「祐為之印」「山家集画行法師」と墨書。 内題 「山家和哥集上(下)」。 歌数

(iv > 。 は版本と同じ一五六 九 首 で ある。 印記 「浮雪」「祐為之印」

(1)、20(20)詞書「坊なるちこ是をきゝて」は、版本系諸本に本書は他の版本系諸本とはかなり異なる形態をもっている。

⑵、版本の開板に際して付せられたと思われる训(吻)の前に共通して欠くが、本書はこれを本行に有している。

| N、∇αにはいたことによった含まな言とらざ、こうで全く余白を設けずに前歌から連続して書写されている。| 位置する内題「山家和歌集下ノ下」が本書にはみられず、▽

があり、むしろその方面からの書入れと思われる。注が付されているが、このあたり、本書には多くのイ本書入れ除いて、これを持たない。33(33)〔一カ所〕及び33(34)に校合除いて、これを持たない。33(33)〔一カ所〕及び33(34)に校合

(4、38(37)詞書の前に、松屋本を除く『山家集』諸本、「又にてこれ以下の部分が追補された、その当初の面影をとどめていてこれ以下の部分が追補された、その当初の面影をとどめているものと思われる。

足」と注記するが、本書はこの注記を持たない。(但し、歌の⑸、巻末の百首中「述懐十首」の下に、版本系諸本「一首不

実数は他の諸本と同じく九首である。)

のかとよりさとりひらけん」とあって、この本文は、陽明本系しのかとよりさとりひらかん」とある下句は、本書では「にしが、本書は、この誤りを犯していない。因みに、陽明本で「にたる哉」と次の55(54)の下句を目移りによって誤写している(6、55(54)の下句は、版本系諸本「にしのことばにふさね

第一類本C及び松屋本に一致している。

(7)、本文に関して一例を挙げれば、版本系独自歌に次の如き

歌がある。

夜初雪

ひらむもしるしよはの初雪(55の次)37月出る軒にもあらぬ山のはの

ある。
おの第五句は、他の版本系諸本では「よはの白雪」とあるが、右の第五句は、他の版本系諸本では「よはの白雪」とあるが、右の第五句は、他の版本系諸本では「よはの白雪」とあるが、右の第五句は、他の版本系諸本では「よはの白雪」とあるが、右の第五句は、他の版本系諸本では「よはの白雪」とあるが、右の第五句は、他の版本系諸本では「よはの白雪」とあるが、右の第五句は、他の版本系諸本では「よはの白雪」とあるが、右の第五句は、

は版本) 書はそうした誤りを犯すことが少ない。 例を掲げる。(括弧内書はそうした誤りを犯すことが少ない。 例を掲げる。(括弧内前述した如く、版本にはかなり多くの誤りがみられるが、本

級(43)初句 いとか山(いとゝ山)、50(54)第四句 煙に月を)、43(43)第二句 むつことつきて(むつことつわて)、にあひて(折におひて)、29(42)詞書 雁声遠近(鴈声遠7(6)第三句 うへそへん(うへそへは)、20(24)初句 折

の(煙に月に)、33(N3)第四句 いとふにたにも(いとふにの(煙に月に)、33(N3)第四句 いとふにたもも)、73(N3)詞書 堀川の局(堀川の房)、55(24)心たにみも)、73(N3)詞書 堀川の局(堀川の房)、55(24)心たにみも)、73(N3)詞書 堀川の局(堀川の房)、55(24)心たにみも)、73(N3)詞書 堀川の局(堀川の房)、55(24)心たにみも)、73(N3)第四句 いとふにたにも(いとふにたにみも)、73(N3)第四句 いとふにたにも(いとふにの(煙に月に)、33(N3)第四句 いとふにたにも(いとふにの(煙に月に)、33(N3)第四句 いとふにたにも(いとふにの(煙に月に)、33(N3)第四句 いとふにたにも(いとふにの(煙に月に)、33(N3)第四句 いとふにたにも(いとふにの(煙に月に)、33(N3)第四句 いとふにたにも(いとふに

もみられる。
一方、本書の本文には、版本系の本文とはかなり異なるもの

(のの)第五句 はなさくらかな (松屋本「花桜かな」・他本「岩のかけふむ」・他本「岩のかけふむ」・他本「おとは」・神、天乙「ひをく」るとは「松屋本、海甲「ひをく」るとは」・他本「ひをく」のとは」、 (松屋本、海甲「ひをく」るとは」・他本「ひをく」、 (松屋本、谷」のかけふむ (松屋本、松、京研「岩のかけふむ」・を本、海中「ひをくる」とは」・他本「ひをく」のかけふむ (松屋本、松、京研「岩のかけふむ」・を本、海中「ひをくる」とは」・他本「おどくのかけるむ」・他本「岩のかとふむ」)

文が多量にみられるのであるが、それは、本書の本文に近いも陽明本系第一類本Cの松・京研両本は、下冊に於て、版本系本に於ては、その傾向が顕著である。すなわち、後述する如く、文に一致するものがあることが、注意される。殊に125(22)以下であるが、しばしば松屋本、あるいは陽明本系第一類本Cの本石の例によっても知られる如く、本書は基調は版本系の本文

諸本の中で最も注意すべき一本と考えられるのである。是正すことができる。その点に於ては、現在のところ、版本系本系諸本の中では、最も古い面影を伝え、版本の誤りをかなりのであったのである。ともあれ本書は、全体としてみる時、版

本書にはイ本書入れがなされている。例を掲げる。

1(1)第五句 かなふ初夢、母(和)調書 伊勢にもり山ふくした)第五句 かないりけん人に、15(13)初句 何となく、昭(17)第三句四句 いりけん人に、15(13)初句 何となく、昭(17)第三句がていりた人に、15(13)初句 何となく、昭(17)第三句が、他に所見なきものである。のかまだのある。他は版本に一致するが、かゝる錯綜した姿を示す本書のある。他は版本に一致するが、かゝる錯綜した姿を示す本書のある。他は版本に一致するが、かゝる錯綜した姿を示す本書のある。他は版本に一致するが、かゝる錯綜した姿を示す本書のか未詳であるが、いずれにせよ、他に所見なき詞句を含むところからみて、今日知られざる伝本が存したのであろうことが窺われる。

一、陽明文庫本系諸本

、版本に代って重視されるようになり、伊藤嘉夫氏によっ陽明文庫本は、版本の不備を補うところ少くない善写本とし

て、

公刊された『山家集』の諸テキストに於て、いずれもその底本本古典全書本、日本古典文学大系本、私家集大成本など、近年て、昭和十六年『西行全集』の底本として用いられて以来、日

を概観しておくことにする。 次に、版本系諸本に対して、本系類に特徴的にみられる事項 となっていることは、前述したとおりである。

まず、本系類には版本に欠く歌六首が存する。次にそれを一

13の次 吉野山みねなる花はいつかたの

括して掲出する。

邓の次 五月雨はいはせくぬまのみつふかみたに、かわきてちりつもるらん(川)

別の次 とりへのやわしのたかねのすゑならんわけしいしまのかよひともなし(別)

四の次 いかにしてうらみしそてにやとりけんけふりを分ていつる月かけ(元)

いてかたくみし有明の月(87)

うかはんすゑを猶思はなん(回) 15の次 なかれ出る涙にけふはしつむとも

50の次 深き山はこけむすいはをたゝみあけて

|陽明本、傍記並びに括弧内に付した番号は版本の それで あ。次に一括して掲出する。本文並びに歌の冒頭に付した番号歌の排列については、十六カ所にわたって版本との異同があ

(—)

33春・霞いまたちいてゝゆきにけん ナシ っち [きゝすを]

きゝすたつ野をやきてける哉(36)

たつはをとってたかゝらぬかは (35) 3かた岡にしはうつりしてなくきゝす

=)

雨中柳

| 〒こよんこうデ卵ファニ (7) | 53なか / 〜に風のほすにそみたれける。**

柳、乱 風柳風にみたる青柳のいと(5)雨にぬれたる青柳のいと(5)

かせによらるゝあをやきのいと(56)5月わたせはさほのかはらにくりかけて

三)

70しらかはの春のこすゑの鶯は 【花の哥あまたよみけるに】

はなのことはをきくこゝちする (79)

この歌は、
の「しらかはのこすゑをみてそなくさむるよしの」

四)

山にかよふ心を」(72)の次に排列されている。

のちりけるかめつらしくおほえてよみける高野に中院と申所にあやめふきたる房の侍けるにさくら

22桜ちるやとをかされるあやめをは

-- 393 --

はなさそふとやいふへなるらん(四)

2005 るはなをけふのあやめのねにかけて坊なるちごこれをきょて

くすたまともやいふへかならん (88)

まる事ありて人のもの申つかはしたりける返事に五日さる事ありて人のすが、 サッ

24をりにあひて人にわか身やひかれまし つくまのぬまのあやめなりせは(2%)

〔むしの哥よみ侍けるに〕

幻秋のよをひとりやなきてあかさまし ともなふむしの声なかりせは(切)

幻秋のよにこゑもやすますなく虫を

露まとろまできょあかす哉(絽)

又、第一類本以外では

協秋の野のおはなか袖にまねかせて いかなる人をまつむしのこゑ(伽)

が切(铅)の前にあって、钑(鉛)・切(铅)・钇(铅)の歌順となっ

〔千鳥〕

550しもさえて河ふけゆくうらかせを おもひしわけになくちとりかな (54)

> 切さゆれともこゝろやすくそきゝあかす かはせの千鳥ともくしてけり(53)

松風増恋

f2いはしろの松かせきけは物・おもふ

右の歌は、版本では「恋」として一括された歌群中にあるが、 人も心そむすほっれける(86)

のいそのまになみあらけなるおりく は

砂せとくちにたけるうしほのおほよとみ うらみをかつく里のあま人 (79)

よとむと、ひのなき涙哉(畑)

78いかにせんこむよのあまとなるほともに 77秋ふかき野への草はにくらへはや(72) ものおもふころの袖の白露

みるめかたくてすくるうらみを(7位)

提婆品

陽明文庫本では、ௌ(鋁)歌の次に、右の如き詞書を伴って排列 されている。

88いさきよきたまを心にみかき出て

いはけなき身にさとりをそえし(%)

885いかにしてきくことのかくやすからん法にあふこのたきゝなりける (88) 84これやさはとしつもるまてこりつめし

あたにおもひてえける法かは(89)

「題しらす」

94あらしこすみねのこのまを分きつ。 95つらふすかりたのひつちをひいて 25つ ほのかにてらすみか月のかけ(%)

谷のしみつにやとる月影(タタ)

〔題しらす〕

別うくひすは

ねなかの谷のすなれとも たひたるねをはなかぬなりけり (®) み こゑ

きくうれしきもはかなかりけり (⑩) %うくひすのこゑにさとりをうっきかは

94すきて行はかせなつかしうくひすい なつさひけりな梅の立枝に(図)

天王寺へまいりたりけるに松にさきのゐたりけるを月の

ひしゆにみてよめるかり

10にはよりはさきゐる松のこすゑにそ 雪はつもれる夏の夜の月(図) る人につけて京へ西住上人のもとへつかはしける同分に待けるにいはたと申所にすゝみて下向しけ

100まつかねのいはたの岸の夕す^み

君かあれなとおもほゆるかな(図)

るをなにそととひけれはまさきなりと申けるを聞て

かつらきをすき侍けるにおりにもあらぬもみちの見えけ

よそのこすゑ·はみとりなる哉(トff) がかつらきやまさきの色は秋にゝて

13なとり河きしのもみちのうつるかけは なとり河をわたりけるにきしのもみちのかけをみて

おなしにしきをそこにまつしく(18) みまほしくてまかりむかひてみけりかはのきしにつきて あらしはけしくことのほかにあれたりけりいつしか衣河 十月十二日ひらいつみにまかりつきたりけるにゆきふり

間とりわきて心もしみてさえそわたる 心ちしけりみきはこほりてとりわきさへけれは

衣河の城しまはしたることからやうかはりてものをみる

衣河みにきたるけふしも(悩)

又のとしの三月に出羽国にこえてたきの山と申山寺に侍

395

なみたてりけるをてらの人!くも見けうしけれは けるにさくらのつねよりもうすくれなゐの色こき花にて

1132たくひなきおもひいてはのさくらかな

133みやこちかきをの大はらを思出る うすくれなゐの花のにほひは(¹¹⁰) 下野国にてしはのけふりをみて

しはのけふりのあはれなるかな(ユサ)

[恋百十首]

131今はわれ恋せん人をとふらはん

世にうきことゝおもひしられぬ(ヨヨ)

131なかめこそうき身のくせに成はてよ

夕くれならぬおりもせらるれ(33)(第五句版本「別ね」)

にはなまいらせけるをりしもをしきにあられのちりける

1368いはにせくあか井の水のわりなきに

心すめともやとる月哉(図) 大師のむまれさせ給たる所とてめくりのしまはしてそのナッ しるしにまつのたてりけるをみて

か」るしるしの契りありける(3%)

13のはれなりおなしの山にたてる木の

次に、本系類諸本のうちお茶の水図書館蔵乙本、京都大学国

研究室蔵本は下冊を欠くので、奥書の有無は不明である。 文学研究室蔵本を除く諸本に奥書を有する。学習院大学国文学 まず、陽明文庫本の奥書には次の如くある。

(A) 以上哥数千五百五十三首

本云一千五百七十二首云々

凡此書本落字僻字太多之又不審哥

繁多也心可授証本

内 今山家集之外又有山家心中抄彼略校

右の「授証本」は、他本を参照してみると「校証本」であろ 此集書出者也

「内」は書落としたものを後から補っている。

この仏の後に、さらに次の奥書を有する一群の伝本が存す

う。「一心」は本書と書陵部蔵乙本以外は「志」と作っている。

る。書陵部蔵乙本によって掲出する。

(B) 西行法師 俗名範滑 号佐藤兵衛尉

び多和文庫蔵本のみにみられるものである。藤原隆信は、山岸 右の「見隆信朝臣集也」の「見」の文字は、書陵部蔵乙本及 建久元年二月十五日入滅之由見隆信朝臣集也

徳平氏が『山家集』の編者に比定された人物である。(「流布本

ことを示す奥書をもつ伝本がある。天理図書館蔵乙本によって 山家集は藤原隆信の編か」『和歌文学研究』第二十一号) (A) 田の後に、さらに細川幽斎によって書写校合の行なわれた

此山家集密、申出

掲出する。

禁裏御本遂書写校合早尤

可為證本平

干時文禄三年季春上瀚

玄旨判

と、次の如くである。略称によって掲出する。 合した系統の本である。現存伝本を奥書によって分類してみる すなわち、 細川幽斎(玄旨)が、文禄三年に禁裏御本を書写校

(A) (B) 関乙・東洋・天乙・神宮・書丙 書乙・松・関甲・日・市・天甲・茶甲・京・筑・多

庫本は他と著しく性格が異なるため、これを別にし、第四類と などによって、四類に分類した。第三類までは、高城功夫氏に 勅撰集の集付がみられる。 版本系諸本には、 書乙本と同一の した。本系類諸本には、第一類本A(陽・学)を除く諸本に、 よる分類に大略従っている。(『山家集諸本の研究』(一)多和文 一本による校合がなされている東京都立中央図書館蔵本以外に 本系類に属する伝本を、奥書・本文・歌の排列・歌の出入り

甲・東洋・市・天甲・茶甲・京・筑・天乙・神宮・書丙・茶 松屋本の各本には、さらにその数倍の歌についての集付がなさ 乙・多の十五本には十八~二六首の歌について、又関乙・日・ 歌が勅撰集に入集しているが、このうち、書乙・松・京研・関 『山家集』からは贈答歌に於ける他人の詠を含め約二百首の

勅撰集の集付はみられない。

『玉葉和歌集』から『続千載和歌集』に至る間、 『玉葉集』 までのものであることである。 すなわちこの集付は れたことを知るのである。 書乙本以下十五本の集付にみられる大きな 特徴 は、集付 南北朝頃付さ

り二百首目あたりまでは比較的丹念に付されているが、それを 越えると数首にとどまっている。

ただ、この集付は綿密になされているわけではなく、

まで、 るが、左記の点に関しては、陽明本も事情は同じであるご 店刊、三二○頁─三二五頁。主として天理乙本に拠っておられ 指摘されている。(『嶽西行法師全歌集』昭和十年二月大岡山書 で、この三本が共通に見落としているものは、約十首である。 関乙・日・松屋本の三本は、勅撰集最後の『新続古今和歌集』 本文については、伊藤嘉夫氏が、版本の不備を補い得る点を ほぼ全体に満遍なく集付を付している。 勅撰集入集歌

その主要な点を摘記させていただくと、

の疑問が解ける。 のが、陽明本によって79の次(76)歌「とりへのや」を得て、こ ワワ(ノエア)歌は版本ではアワ歌を欠いて、意味不明であったも

て、他人詠であることが判明する。(都・三には詞書がある。) いたが、陽明本で「坊なるちここれをきゝて」という詞書を得 (3) (2)28(28)歌「ちるはなを……」は、版本では詞書を欠いて 98(88)歌の前に「暮秋」の詞書を得る。

本では「隆信なと」とあり、より具体的になる。 (4)四(四)詞書中、版本で「ひとく」とあった箇所が陽明

- 恋」の詞書のもとにω(研)の次に位置している。た六十首の歌群の中に一括されていたが、陽明本では「松風増行」の(研)「いはしろの……」は、版本では「恋」と題され
- くなん」を版本は欠いている。(6) 87(82)の左注「かくおもひて程へ侍にけりと申て返事か
- である。
 (7) 55(33)歌の下句、版本は「山へは雪そ哀也ける」とあり、これは、陽明本には「雪あはれなるふかくさのさと」とあり、これは、陽明本には「雪あはれなるふかくさのさと」とある
- 伊藤氏の指摘された点に、もう二・三付け加えるならば、次が、これは陽明本によって正される。(三は誤っていない。) 80 55(54)歌の下二句を版本は目移りによって誤刻している

の如きものがある。

- あろう。寂然は西行の年来の心許した友である。集』、『西行法師家集』などにもある如く「寂然」とあるべきでをよみける」とある「寂蓮」は、陽明本をはじめ『山家心中をよみける」とある「寂蓮」は、陽明本をはじめ 『山家心中
- べて仁和としている。) 本のうち、仁安とあるのは、陽明本及び書乙本のみで、他はす であり、陽明本の如く仁安とあるべきである。(但し、本系類 四国の方へ旅をした由を記しているが、仁和は九世紀末の年号 四国の方へ旅をした由を記しているが、仁和は九世紀末の年号 本のうち、仁安とあるのは、陽明本及び書乙本のみで、他はす 本のうち、仁安とあるのは、陽明本及び書乙本のみで、他はす であり、陽明本の如く仁安とあるべきである。(但し、本系類 四国の方へ旅をした由を記しているが、仁和は九世紀末の年号

同様の例はもう一例あって、23(21)詞書に「承和元年六月一

安とあるべきである。 「承和」 は九世紀中葉の年号であり、 陽明本にみられる如く承日院熊野へまいらせ給けるついてに云々」と版本にはあるが、

次に分巻の次第をみると、版本が上下二巻であったのに対

未整理部分が終るところで区切られている。
大整理部分が終るところで区切られている。中巻と下巻は、「題しらず」として一括された下巻 一〇四二~一五五二(〃 一〇五八~一五六九)雑中巻 五七八~一〇四一(〃 五九二~一〇五七)恋雑中巻 五七八(版本番号 一~ 五九一)四季上巻

特徴である。 対し、本系類諸本は、内題を「山家集」とすることが、一つの対し、本系類諸本は、内題をすべて「山家和歌集」とするのに又、版本系諸本が、内題をすべて「山家和歌集」とするのに

蔵本など、多くが陽明本系の本文を有している。 蔵本など、多くが陽明本系の本文をもつものであることが注意される。管見に入った範囲では、陽明文部蔵甲本などが版本系の本文をもつものであるほかは、陽明文部蔵甲本などが版本系の本文をもつものであるほかは、陽明文部であることが注意される。管見に入った範囲では、書陵るものであることが注意された伝写本は多くが本系類に属す次に、大家集として合集された伝写本は多くが本系類に属す

しばしば次の歌の詞書と連続して書写されていて、文意をわか38(33)〔二種〕、38(37)の各歌である。これらの歌の左注は、58(120)、14(120)、181(120)、28(181)、24(282)、14(120)、181(141)、集』には、九箇所にわたり十種の左注が存在する。それらは、集』には、九箇所にわたり十種の左注が存在する。『山家集』には、五道に関する書写形態について付言する。『山家

事実を知るのである。 事実を知るのである。 事実を知るのである。

芽一類本

A 陽明文庫蔵〔江戸初期〕写 三冊

いて、幾つか例示する。い位置に立つものであることが窺われる。注意されるものについ位置に立つものであることが窺われる。注意されるものにつ本文をみると、本書が本系類に於て、現在のところ祖本に近

右の、81、91、30などの例をみると、本来陽・学の如くあった 768 753 作 別(器)第二句 こをやしな こをやしな うをやしな うをやしな うをやしな 912(88)注記 22(77)注 92(89)詞 30(%)第五句 82(79)初 記 あきせみの (ナシ) (ナシ) (구 シ) きたり こゑ なにとかや ひに あきせみの いに ナヽタリノ (ナシ) こゑ (ナシ) きたり なにとかや ひに とイ とイ とイ サンタリノ サンタリノ サンタリノ サンタリノ こゑ 秋せきの あそひたへ あそひたへ 河澪標事 きたりたり なにとはや 秋漂,河湾 で 神,湾標 事 こゑ きたりたり なにとはや ナヽタリノ あそひたへ きたりたり なにとはや

(本文は陽明本、傍記したのは版本の本文である。)より百首目までにみられる、陽明本独自異文を抽出してみる。れるものであるが、 惜しむらくは誤写が多い。 試みに、 巻初れるものであるが、 惜しむらくは誤写が多い。 試みに、 巻初本書は、かく本系類本中の祖本に最も近い位置にあると思わ

94(91)第二句 散にそむらん

きる。 である。陽明本が如何に誤写の多い本であるかをみることがである。陽明本が如何に誤写の多い本であるかをみることが、明らか右のほとんど全部が、誤写に基づくものであることは、明らか

言葉での利く場出下ること、「等品は包ょこはものまで」同じ範囲について陽明本と同系の学習院大学本について、独

35(34)第二句 しはうつりきて 59(56)詞書 待花忘日 (他自異文の例を掲出すると、(傍記は他本に共通の本文)

二句 こすゑ・にみてそ 邓(川)第五句 ひるなかららん 匆の第一類本「田」、第二類本「時」、版本「他」) 7(8)第

ない。それにつけても、学習院本は現存するのが上中冊のみで本系類の最善本とするのは、必ずしも当を得たものとは思われ陽明本に比して、誤写はかなり少ない。従って陽明本をもって(%)詞書 山寺の花さかり成けるを (後略)

典型的に現われている。 陽明本に誤写の多いことは、「花」と「春」の誤写に関して、下冊を欠くことが惜しまれるのである。

び括弧内に付した番号は版本。) 次に、それらの例を陽明本の本文をもって掲げる。(傍記及

川山おろしのこのもとうつむ春の雪は

14 おほつかないなは心の春にのみ 春 花 (14)

いつれのとしかうかれそめけん(⑸)

4 いこう ここう ここう こう こう こう いっぱなにとかくあたなるはるのいろをしも

174かきりあれはころもはかりはぬきかへて 174かきりあれはころもはかりはぬきかへて

春をたつねぬ山路なりせは(タイ) 花 でんしょう かんしゅん まよはまし

て、陽明本本文が誤写によるものであることは、歌意からしてて、陽明本本文が誤写によるものであるう。他の歌においい。 この別合も、「花」とあっている。 11に関しては、第一類本のみ学「春」・書これている。 11に関しては、第一類本のみ学「春」・書これている歌群中にある一首であるが、この歌群の歌をみるだされている歌群中にある一首であるが、この歌群の歌をみると、他の歌はすべて「花」か「さくら」の語を詠み込んでおり、と、他の歌はすべて「花」か「さくら」の語を詠み込んでおり、他の歌はすべて「花」か「さくら」の語を関しては、陽右のうち、114を除いては、「春」と「花」の語に関しては、陽右のうち、114を除いては、「春」と「花」の語に関しては、陽

文の誤りをそのまま踏襲している。し、版本等によって改めている箇所もあるが、多くは陽明本本起因するものと思われる。 現行諸テキストも、 上記の 例に 関ける「はる」と「はな」の「る」「な」の草体の字形の類似に明らかであろう。すなわち、この誤写は、依拠本乃至祖本にお

学習院大学国文学研究室蔵〔江戸中期〕写

二冊(欠下冊)

明本と同じ一五五二首である。

末孫秀清孫康清一男」との記載がある。 (存上、中冊) 濃紺地花卉文様空押表紙、十四・三×十九・六(存上、中冊) と墨書。内題「山家集上(中)」。第一葉付、「山家集上(中)」と墨書。内題「山家集上(中)」。第一葉種。料紙、鳥の子。字面高さ約十三種。毎半葉十二行。墨付上種。料紙、鳥の子。字面高さ約十三種。毎半葉十二行。墨付上種。料紙、鳥の子。字面高さ約十三種。毎半葉十二行。墨付上

である。 する。所収歌は、上巻五七七首、中巻四六四首、計一〇四一首する。所収歌は、上巻五七七首、中巻四六四首、計一〇四一首歌数・歌の排列、版本との関係などは、陽明本の場合と一致

は、むしろ陽明本に優る善本であると認められる。ま誤りがみられるが、全体として眺める時、誤写が少ない点でて、誤写の数は陽明本に比してかなり少ない。仮名遣いにはま本書は前述した如く、 本文を陽明文庫本と共有 する。そし

【函架番号 五〇一・五一一】書陵部蔵〔江戸中期〕写 三冊 乙本

を

В

Web transion 是はりり 四十一丁。題簽、表紙左肩に「山家集上(中、下)」。内題「山四十一丁。題簽、表紙左肩に「山家集上(中、下)」。内題「山二・五糎。毎半葉十行。墨付上冊四十丁、中冊三十五丁、下冊香色無地表紙、二十九・五×二十一・七糎。字面高さ約二十

同一の排列を示すほかは、陽明本の排列に一致する。歌数は陽本書は、宀、絽(铅)・铅(铅)、□、78(铅)・70(83)が版本と家集上(中、下)」。奥書仏邸

本文は、第一類本の中で、しばしばAとCの中間的形態を示て、次に数例を掲げる。

161(159)初 75(80)第五句 66(60)第三句 327(32)第三句 30(25)第五句 270 265)詞 我袖も こゑ そこの心を をゝしさは あきせみの あとたえて 陽明本 秋せきの をゝしさはゝ゚ィ こゑ 底のふかさ わか袖も 野徑秋風 あとみえて 本 書 我宿ははイ こゑ 底のふかさ 秋せきの 野徑草花 あと見えて をかしさは 松平本

С 島原公民館松平文庫蔵 〔江戸前期〕 写

冊五十一丁。題簽、表紙左肩に「山家集上(中、下)」。 「山家集上(中、下)」。印記「尚舎源忠房」。奥書⑷⑻。 一·五糎。毎半葉十行。 墨付上冊四十九丁、 茶褐色無地表紙、二十八・七×二十一・二糎。字面高さ約二十 中冊四十五丁、下 内題

(132) 四33(131)・133(131)の各項の排列は、 (1092) (107) \cdot (1093) \cdot (1094) \cdot (1076) \cdot (1147) \cdot (1130) \cdot (1149) \cdot (1150) \cdot (1150)巻に於て、次の如き相異を示す。すなわち、⑴70(64)・79(63) 歌の排列については、上巻は陽明本と同一であるが、中・下 陽明本独自歌528の次歌、 版本に一致する。

深き山は苔むす岩をた。みあけて

ふしにしかたをおさめたる哉(⑸)

特異な形態を示している は、本書と次述する京研本のみ、53(55)の次に位置して、やゝ

104にわ鳥はさきゐる松の梢にそ 本書は例(例)の後に、次の歌を行間に書入れている。

雪はつもれる夏の夜の月(156)

が、かかる現象をみた理由は、陽明本系第二類本系の本文によ 述した如く、陽明本系では凹(四)の次に四(四)が排列されてい ところが、このあたりは、版本と同様の排列になっており、 って、このあたりが校合されているからである。すなわち、前 の歌は、本行に既に存する。従って、四は重出することになる

> れる夏の夜の月」となっている。 は別筆であって、本行では「庭とりも鷺居る松の梢より雪は積 たために、 かかる重出を生じたのである。因みに、この書入れ

る。 版本系の本文の流入をみることと密接に関連する。以上によっ て歌数は、陽明本より三首多い一五五五首、書入れ歌一首であ 、150次)、23(27の次) の三首が存する。これは下巻に 於て、 さらに、本書には、陽明本に欠いていた、 1113 10% の次)、 1168

るをみて」の上に「写本是より落」、又、 116(15の次)詞書一行目「松の木のまよりわつかに月影ろひけ 下巻には、四カ所に付箋が施され、次の如く記されている。 (四)詞書二行目「都に帰けるに」とある上に「是迄落ル」 同歌の上に「是迄

ねか」の上部に「写本一行落ル」 |443(44)|詞書二行目「の咲たりけるを||355(35)|詞書の上に「写本一行落ル」 (44)詞書二行目「の咲たりけるをみてなしのほしきよしを

ているものと思われる。135及び14の付箋については、第二類本 は33詞書を欠き43詞書を有する。) 総じて本書下巻にみられる 行分を欠いている。(但し、日本女子大本は35詞書を有し、143 が、35詞書及び14詞書のうちの陽明本で第二行目に相当する一 屋本も11詞書までを欠き「此間哥落たる歟」と注記している。 が、さらに川(四)詞書までを欠く本が存したのであろう。 松 詞書一行を欠く。又神宮文庫本・天理図書館乙本・書陵部丙本 |16||詞書の付箋については、陽明本系諸本が16||を欠く事実を指し 右の川(〒)付箋については、陽明本系諸本川(〒の次)を欠く

る。付箋の注記は、第二類本系のものであることが知られるのであ

次に本文をみると、全体に次述する京研本との共通異文を多く有するが、特徴的なことは、下巻、すなわち、185(四)以下のなである。このことは歌の排列にもみられたとおりである。ことである。このことは歌の排列にもみられたとおりである。ことである。このことは、下巻、すなわち、185(回)以下の本文が、しばしば版本系の、殊に三手文庫本の本文に一致する、信仰というでは、

21(19)第四句 はなはわかなの 62(87)詞書 後朝・橘 632

(66)詞書 寄月恋(松平本、見消ちして朔日と正す) 49(47)第1日西 7月見思面(松平本は見消ちして正す) 23(28)詞書 …六月月見思面(松平本は見消ちして正す) 23(28)詞書 …六月

正している。 松平本ではこれらをしばしば見消ちして訂るものと思われる。松平本ではこれらをしばしば見消ちして訂し…」以下を欠いている。これら共通異文の多くは、誤写によ又、例(函)詞書、京研本「又のとし…」以下、松平本「のと又、例(函)詞書、京研本「又のとし…」以下、松平本「のと五句」あられける哉(松平本、「身をイ」とす)

陽「山河の水」)、18(117)第二句 吹くる雨の(三「吹くる雨い(169)第五句 谷川の水(三「谷川の水」・版「山川の水」・次に三手文庫蔵本に一致する本文の例を掲げる。して用いられているのは、本系類第二類本である。

は」・陽「人もおもへは」) 五句 人を思ひて(三「人をおもひて」・版「人をおもへき(三「うらむへき」・版及び陽「とかむへき」)、33(31)第の」・版及び陽「ふりくる雨の」)、29(28)第三句 うらむへ

京都大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写

集上(中、下)」。奥書なし。印記「立習文庫」。
「山家集上(中、下)」左肩に「西行歌集」と墨書。内題「山家五丁、中冊四十四丁、下冊四十八丁。外題、元表紙中央上部に五丁、中冊四十四丁、下冊四十八丁。外題、元表紙中央上部に紙、二十三・三×十七・六糎。見返し、金泥蝶雁鶴等飛翔模様。紙、二十三・三×十七・六糎。見返し、金泥蝶雁鶴等飛翔模様。紙、二十三・三×十七・六糎。見返し、金泥蝶雁鶴等飛翔模様。紙葉装、三冊。厚手鳥の子元表紙、木賊色草花模様裂改装表

前述した如く、本書は松平文庫本と同系統に属し、歌の排列前述した如く、本書は松平文庫本より一四二首少ない一四一三いる。従って、歌数は松平文庫本より一四二首少ない一四一三本文も松平文庫本に酷似する。本書と松平本の本文を比較すると、約四十カ所に相異が見出されるが、その殆んどは、両本ると、約四十カ所に相異が見出されるが、その殆んどは、両本と一致する。但し、本書は松平文庫本と同系統に属し、歌の排列前述した如く、本書は松平文庫本と同系統に属し、歌の排列前述した如く、本書は松平文庫本と同系統に属し、歌の排列

て、校合のなされている箇所が両本で異なる場合がしばしばみたと思われるものとの、二通りが考えられるのである。 従っ本に記されていたと思われるものと、それぞれが別個に校合しみると、共通するものとしないものとがある。すなわち、原写本書にもイ本書入れがみられる。それらを松平本と比較して

と注記されている場合がある。 イ本注記があって他方にはみられない場合、あるいは「―歟」られる。又同一語句に校合注が付されている場合でも、一方に

であるう。

を同じくすることによっても窺われる。 松平本との親近関係は、本書の上・中巻が、松平本と、行格

第二 類 オ

A 関西大学図書館蔵〔江戸前期〕写 三冊 甲本

内題「山家集上(中、下)」。奥書(A)(B)。印記「岡田真之蔵書」。師家集上(中、下)」と墨書。 同右下に、やや小字にて「山家集」、中冊四十二丁、下冊五十一丁。外題、表紙左肩に「西行法工、中冊四十二丁、下冊五十一丁。外題、表紙左肩に「西行法工糎。毎半葉十行。 字面高さ約二十二・五糎。 墨付上冊四十三 (六家集十九冊のうち)淡黄蘗色無地表紙、二十八・六×二十・(四級番号九一一・二三八・S二・一一一/三)

歌の異同に関し、大量の脱落歌を有することが、第二類本のおくことにする。まず、第二類本にみられる特徴を、陽明本と対比して記して

ものであろう。

三冊それぞれ別筆である。

が脱落している。 822(847)割書後半~832(817)の一丁分、532(847)の44(947)の二首を欠いている。まに、第二類本Cのみ、79(707)、742(747)の二首を欠いている。まに、第二類本Cのみ、79(747)、743(747)の二首を欠いている。まに、第二類本Cのみ、79(747)、743(747)の一丁分、特徴である。 すなわち、125(137)、283(232)~343(337)の一丁分、特徴である。 すなわち、125(137)、283(232)~343(337)の一丁分、

282~38については、天甲本・市岡氏蔵本が、又、222~88については、筑波大本が、それぞれ前後改丁箇所に当っており、ちいては、筑波大本が、それぞれ前後改丁箇所に当っており、ちによっても、又殊に後者については、822(87)詞書の前半「と態によっても、又殊に後者については、822(87)詞書の前半「と態によっても、又殊に後者については、822(88)詞書の前半「とまうど各一丁分の脱落であることを示している。かかる書写形がくのわさはであることは明らかである。

になく、中巻末すなわち悩(悩)の次に書写されている。第二類本B(関乙・東洋)では、さらに%(%)が、本来の位置二類本及び第三類本に共通してみられ、陽明本と異っている。二類な及りに関しては、ሢ(愆)・纷(切)・纷(切)・貎(収)の歌順が、第

されているように、恐らく第三類本より、奥書のみ転写されたかしながら、本文は、第二類本系のものであり、高城氏が注意奥書(2)の部分「此山家集密、申出……」が加えられている。し、第二類本Bとして分類した関乙・東洋の二本は、さらにるが、第二類本の奥書は、陽明本と同一の奥書を記した後に、前述第二類本の奥書は、陽明本と同一の奥書を記した後に、前述

である。その関係は、次の如き兄弟の関係に立つものであろである。その関係は、次の如き兄弟の関係に立つものである。そのには、本文に相違がみられることである。さらに、Cの中で、は、本文に相違がみられることである。さらに、Cの中で、は、本文に相違がみられることである。さらに、Cの中で、は、関甲・日の二本が、最も陽明本に近い本文を有している。は、関甲・耳の二本が、最も陽明本に近い本文を有している。は、関甲・耳の二本が、最として分類した関乙・東洋の二本には、京・筑の二本の間に、直接の承接関係を想定することは困難ただ、この二本の間に、直接の承接関係を想定するといる。

第一類本——第二類本及——第二類本B

の本文に一致する例を掲げる。本文がかなり見出されることが、一つの特徴である。次に版本本文がかなり見出されることが、一つの特徴である。次に版本を、第二類本には、殊に第二類本Cには、版本に一致する

②(1) 詞書「……なりにけれは」(第二類本C。陽「よいにした」) 図(9) 詞書「……とした」(第二類本C。陽「…とした」) 図(9) 詞書「……とした」(第二類本C。陽「…とした」) 図(11)第三句「みおつくく第二類本C。陽「木こそさく」) 図(11)第三句「みおつくく第二類本C。陽「木こそさく」) 図(11)第三句「みおつくし」(日を除く第二類本C。陽「みをしるし」) 56(55)第五し」(日を除く第二類本C。陽「及び日を除く第二類本と部。陽「なりでなそ」)

さて、本書の問題に返って、まず歌の異同に関して陽明本と比較してみると、I5(沼)、28(沼) 243(沼)、22(初) 480(85)、比較してみると、I5(沼)、28(沼) 243(沼)、22(初) 480(85)、比較してみると、I5(沼)、28(沼) 243(沼)、22(初) 480(85)、比較してみると、I5(沼)、28(沼) 243(沼)、22(初) 243(沼) 243(沼)、243(沼) 243(沼) 243(沼)

書独自のものである。 二・三類本に共通のものであり、14(38)・14(37)の歌順は、本歌の排列については、40(43)・49(47)・48(47)の歌順は、第

の中では、本書が最も陽明本の本文に近いといえるのである。両者を比較すれば、本書の方がさらに近い。従って、第二類本本文は、前述した如く日女大本と共に陽明本に近似するが、

B 関西大学図書館蔵〔江戸中期〕写 一冊 乙本

の次の識語がある。(朱) 「岩崎美隆文庫」(朱)「紀氏蔵書」(朱)。 第二丁オに岩崎美隆集」と墨書。 内題「山家集上(中、下)」。 奥書A(B)©。 印記二十一糎。毎半葉十行。墨付百三十八丁。外題、左肩に「山家黒」と墨書。 内題「山家集上(中、下)」。 奥書A(B)©。 印記二十一糎。毎半葉十行。墨付百三十八丁。外題、左肩に「山家港」と思う。

『此本は京人紀ノ氏辰といふひとのbloc/もちしよし 天保/十

に/朱もてかきくはへつ天保十五辰のとしの九月十二日/岩和泉国田分人尾崎正明のもたれたる古写本をかりてかたはら四卯年なにはの書商人の手より伝たる也かくてまたことし/

であったためと思われ、39(33)、150(147)の補入がないのは、転れていないのは、校本が日本女子大本と同一系統に属する一本れていないのは、校本が日本女子大本と同一系統に属する一本のである。39(33)が補入さいないのは、校本が日本女子大本と同一系統に属する一本のでも二類本に共通に欠く歌のうち、175であったためと思われ、39(33)、180(147)の補入がないのは、転さらに陽明本系の中でも二類本に共通に欠く歌のうち、175であったためと思われ、39(33)、180(147)の補入がないのは、転さらに陽明本系の中でも二類本に共通に欠く歌のうち、175であったためと思われ、39(33)、180(148)の補入がないのは、転

写の際の書落しであったかとも推定される。

しに気付いた本書又は依拠本の筆写者が他本よにって書入れをの注記があるところからして、校本からのものではなく、書落の注記があるところからして、校本からのものではなく、書落いる。但し、これは本文と同筆であり、同時に「イナシ」と朱いる。但し、これは本文と同筆であり、同時に「イナシ」と朱いる。但し、これは本文と同筆であり、同時に「イナシ」と朱いる。但し、これは本文と同筆であり、同時に「イナシ」と朱いる。但し、これは本文と同筆であり、同時に「イナシ」と朱いる。似(54)~67(44)の次に「イ本」と注記して書入れてく、中巻末、即ち、105(41)の次に「大大」という。

したものであろう。

74(74)には「イナシ」と注記がある。同歌を欠くのは、

ず、本文も一致することにより、イ本は日本女子大本と同一系本の中では、日本女子大本のみである。そして、排列のみならて行間に補写されている。この排列に一致するものは、現存諸類本Cである。又、⑶(⑶)は、⑷(紭)の次にも「イ」と注記し

を重出したものである。これらの書入れは、すべて朱筆によっこの書入れしたもののうちの二首は、本行にすでに存するもの以上によって、歌数は一五一四首、書入れ補入歌は四九首、統に属する一本であることが知られるのである。

列は本書独自のものである。(切)・43(松)、口切(粉)・56(物)の二カ所に相異がみられる。(切)・43(松)、口切(粉)・56(物)の二カ所に相異がみられる。歌の排列については、陽明本と比較すると、 口物(切)・物

てなされている。

本文は、他の第二類本系諸本と共通するものが多いが、そうなCと異る本文を示すことがままみられる。数例を挙げる。よて(失)ので、本書が次述する東洋大本と共に、第二類本Aあるいした中で、本書が次述する東洋大本と共に、第二類本Aあるいると、2025に10 名で、2025に10 名で、202

8(7)第三句 花をえたる(書乙「名もえたる」他本「名を2(7)第三句 花をえたる」) 40(41)第五句 いりてはてぬき、他本「このさとにてや」) 40(42)第五句 いりてはてぬえたる」) 10(9)第四句 此里まてや(版本「木の下にてえたる」) 10(9)第三句 花をえたる(書乙「名もえたる」他本「名を8(7)第三句 花を

分を傍書しているものである。ともに「イ」として同一注記をり、他の一は、校本の本文を本書の本文と対校して、異なる部は、校本に加えられている校合注をそのまま転写したものであし、朱で校合を加えている。その方法に二通りあって、その一さて、本書は岩崎美隆が日本女子大本と同系の一本で 対校

筆、墨書)と、校本より転写されたもの(朱書)の、二通りが本書は集付をもつが、これも当初より存したもの(本文と同

附している。

電入れ補入歌も、おおむね日本女子大本と同系の一本より転置しているが、本書でも、それと同じ位置に20(25の次)を書入写している。日本女子大本では20(25の次)歌は28(24)の次に位ましている。

ルCハら。 巻末には、日本女子大本巻末に記載されていた『山家集』に ・

東洋大学図書館蔵〔江戸中期〕写 一冊

(B)(C)。 (B)(C) (B)(C)

本書には、52(58) ~73(70)歌の数丁にわたり錯簡がみられ

歌の異同に関しては、陽明本系が欠く版本独自歌をすべて欠る。

(34)を当該位置に書落して155(141)の次に「イ本」と注記して書(147)を有する点は第二類本Cと異なり、同Aと共通する。又978(181)、155(147)の各歌も同様に欠いている。そして 79(70)、764を、又第二類本が欠く75(73)、282(22)~43(37)、822(187)~830を、又第二類本が欠く75(73)、282(22)~43(37)、822(187)~830を、又第二類本が欠く75(147)、282(22)~43(37)、822(187)~830を、

歌数は、一五二五首である。写している点が、第二類本Aと異なるのである。以上によって

本文は関乙本の項で述べた如く、同本との間にしばしば共通歌の排列も関乙本に一致する。

異文を見出すことが一つの特徴である。

C 日本女子大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写 一冊C 日本女子大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写 一冊C 日本女子大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写 一冊

みみられる特徴である。 さらにワイ(ワイ)、アタイ(アイ)の二首を欠いているのが第二類本Cにのの各歌を欠くことは、第二類本共通にみられるものであるが、の各歌を欠くことは、第二類本共通にみられるものであるが、しておく。ワクイイアイ)、ス8イ(スン)~4タイ(スン))、8クイ(∀イ))

まず、第二類本Cにみられる歌の異同につき、その特徴を記

である。 て歌が大量に補入され、しかもその多くが本行化されている為は著しく異なる様相を示している。それは、版本系の本によっは予しく異なる様相を示している。それは、他の第二類本としかしながら本書は、歌の異同に関しては、他の第二類本と

(100の次)、111(100の次)、116(151の次)、123(127の次)、111(10の次)、111(10の次)、11(10の次)、11(10の次)、11(10の次)、11(10の次)、11(10の次)、11(10の次)、11(10の次)、11(10の次)、11(10の次)、11(10の次)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(1100x)、11(

次)は、細字で書入れされている。ち、鄒(55の次)、矧(58の次)の二首は本書にも欠き、幻(34のたいるのである。陽明本に欠き版本に存する残りの歌三首のうに付されている。すなわち、「イ」の注記は、上巻のみに付され右のうち、※印を付した十二首には、「イ」の注記が歌の末尾

れぞれ本行に重出する。これも、版本系の本による補入の結果本書では、ゐ(印)の次及びゐ(印)の次、即ち版本と同位置にそ又、陽明本系諸本、ൈ(印)がゐ(印)の次に位置しているが、

120 52 15

せている。 り、鐚(印)の次では、版本と同一の本文であるという相異をみと思われる。従って、巛(印)の次では陽明本と同一の本文であ

は重出歌一首を含み、他に書入れ歌二首がある。以上によって、本書の所収歌は、一五六九首である。これに

際に、位置を間違えたものであろう。 本系諸本にほぼ一致して欠く歌であるが、本書に書入れをする 二箇所に本書特有の排列が表われている。20(15の次)は、陽明 示すほか、□20(25の次)・29(15)、□35(33)→33(35)の次、の 示すほか、□20(25の次)・29(15)、□35(33)→33(35)の次、の ぶが版本と同一のパターンを かの排列に関しては、前述した如く、86が版本と同位置にも

本文は、全体としてみると陽明本系第二類本としての特徴を本文は、全体としてみると陽明本系第二類本として、例を掲げ市岡氏蔵本が陽明本本文に一致する場合を(3)、本書とる。次に、本書のみが陽明本本文に一致する場合を(3)、本書とる。次に、本書のみが陽明本本文に一致する場合を(3)として、例を掲げる。

12(18)第三句	5(4)初 句	15(13)詞書	(A)
ちりぬ花		伊勢の敷	(本 書)
ちりね花	山里に	伊勢の	(茶甲・京・筑)
ちりぬ花	山さとへ	伊勢に	(陽明本)

156(55)第五句 1262 1244 初 157(15)第三句 なそ た」よふや 木にそさく わりなしや ・よしや ^{ナシ} ^ふ敷 ナシ なそ 木こそさく われなしや

86(83)初 (B) 句 かさこしの (本書・市) (天甲・茶甲・) かきこしの かさこしの (陽明本)

を有する一本といえるであろう。 すなわち、第二類本Cの中では、 1439 1421 初 比較的陽明文庫本に近い本文

1359(34)第五句 22(27)第三句

我か心や

みをしるし

みおつくし

みをしるし

われか心や

あしよしを

よしあしを わか心なり

あしよしを

なるものの例を掲げる。(括弧内は版本) するが、それらは版本と同一の本文ではない。 本書は、前述した如く、陽明本に欠く歌を、多量に本行に有 版本と本文の異

21(20の次)第三句 心かけて(玉かけて)

37(31の次)第四句 雲の波たえ(雲の波さへ)

けるをし

53(55の次)第五句

夜半の初雪(よはの白雪)

1168(151の次)詞 きて道を行といふことを) の木のまよりわつかに月のかけろひけるをみて月をいたゝ 月をいたゝきて道を行といへる事を(松

> であるが、版本系では三手文庫本のみ「よはの初雪」の本文と 詞書に「夜初雪」とあって、版本より本書の本文の方が良いの 右のうち、37・57には歌の末尾に「イ」の注記がある。57

この部分の本文には、陽明本・版本いずれにも一致しない独自 ので、いちおう第二類本系本来の形態かと推測されもするが、 なっている。 (85)の部分の本文をみると、この部分には「イ」の注記がない さらに、第二類本のみに欠く38(32)~34(37)、82(87)~830

異文及び版本に一致するものが多い。 328(322)第二句 月に残れる(版・陽「月にかゝれる」)、

329

へてなを心のなをや」)、34(38)第五句 明ぬなる哉 (版「明 (33)第二句 氷をしける (版・陽「氷そしたる」)、33(33)第 一・二句(なへてなき所の名をや(版・本書に同じ、陽「な

823(888)第三句 名残あるを (版・本書に同じ)、陽「のこり さらに別や(版「さらになけきは」、陽「さらになけきや」) とも (版・本書に同じ)、陽「いかにとも」)、84(89)第四句 (版・本書に同じ)、陽「をいもせぬ」)、83(88)初句 にけるかな」、陽・本書に同じ)、34(33)初句 おもひせぬ

入れは、本書で生じたともみられるが、むしろ、依拠本ですで に行われたものだったのではなかろうか。 と同様、やはり他本からの書入れであろうと思われる。この書 く、独自異文も比較的少ないので、この部分も、他の書入れ歌 本書は全体としてみると、本文は陽明本のそれにかなり近

は困難である。 は困難である。 は困難である。 はに所見なき独自のものが混在し、特定することを付したものが、しばしばみられる。 イ本を検討してみると、を付したものが、しばしばみられる。 本書の書入れには、合点

88(8)第四句 花を・・・つる 24(44)第三句 したふ哉 25人にイ本の本文が、他に所見なきものの例を掲げる。

すめる水ならねとも 82(87)初句 いるさには 22(18)第四句 秋さきたつる 55(43)第四句 つほめる花の(25)第四句 秋さきたつる 55(44)第四句 つほめる花の(25)第四句 秋さきたっる 55(44)第四句 つほめる花の

イニ むかしみし月の光を一此哥迄在上下有二冊瞻西上入ノ哥新むかしみし月の光を一此哥迄在上下有二冊瞻西上入ノ哥新ところで本書には、38(38)の次に注目すべき書入れがある。

5

五句

花は咲めりてきまけれ

古今巻軸也不審/爰マテ以別本校合了此末ハ無別本古今巻軸也不審/爰マテ以別本校合了此末ハ無別本 古今巻軸也不審/爰マテ以別本校合了此末ハ無別本 古今巻軸也不審/爰マテ以別本校合了此末ハ無別本 古今巻軸也不審/爰マテ以別本校合了此末ハ無別本

は一首前の「おひもせぬ」の歌の下に付されている。) は一首前の「おひもせぬ」の歌の下に付されている。) は一首前の「おひもせぬ」の歌の下に付されている。) は一首前の「おひもせぬ」の歌の下に付されている。) は一首前の「おひもせぬ」の歌の下に付されている。) は一首前の「おひもせぬ」の歌の下に付されている。)

有するが、このイ本は百八首の歌を有するものだったのであろは一○九首、陽明本は一○七首、松屋本は一○三首の歌 数を中巻末「題しらす」の下に、「無題歌百八首イ」とある。版本中巻末「題しらす」の下に、「無題歌百八首イ」とある。版本の(35)以下は、「題しらす」として一括される歌群であるが、

集の面影を探る一つのよすがとして注目されるのである。ともあれ381歌までの本をも校合に用いていることは、原山家

簽、表紙左肩に貼付、「山家集上(中、下)」。 内題「山家集上二十一糎。墨付上冊四十六丁、中冊四十丁、下冊四十七丁。題十七・九糎。綴葉装。料紙、鳥の子。 毎半葉十行。 字面高さ約縹色地に金泥にて松・雲・水辺草花等を描ける表紙、二五×市岡勝太郎氏蔵〔江戸初期〕写 三冊

(中、下)」。奥書(4)(日)

(32)~343(37)、82(87)~83(85)、15(44)の各歌を欠くことは、 まず、歌の異同に関して、陽明本と比較すると、75(73)、328

第二類本Cにみられた特徴である。さらに本書は、28(28)の次 第二類本に共通であり、アタ(アロ)、アム(アタ)の二首を欠くことも、

又183(16)を欠くが、本書独自のものである。以上によって、本

に29(24)を重出している。恐らく不用意によるものであろう。

書の歌数は一五二三首、うち重出歌を一首含んでいる。 歌の排列についても、40(43)・45(45)・45(45)の歌順が第二・

三類本に共通してみられるものであるが、さらに、次の三箇所 に本書独自の排列がみられる。(|54(55)・55(55)・56(55)・56 (55), (1)47, (103) · 1048, (103) · 1049, (103) · (

が近似することと併せ、注意されるのである。 行前後するだけで、きわめて近似した形態を有している。本文 丁オまでほぼ行格を等しくするほか、全体的に見ても、一・二 書写形態について付言すると、本書と次述する天甲本は、九

本文を有している 筑の各本に一致するが、どちらかと言えば日本女子大本に近い 本文は、時に日本女子大本に一致し、時に天甲・茶甲・京・

天理図書館蔵〔江戸前期〕写 九一一・二・イー六三・六(A八一八)) 一冊

さ約二十糎。墨付百三十三丁。外題、表紙中央上部に「山家集. 茶色無地表紙、二十五·四×一八·八糎。毎半葉十行。字面高 面高さ約十八・五糎。毎半葉十行。 墨付上冊三十一丁、 中冊三 泥・緑・赤紫色等にて草花を描く。 紺地金泥山水模様表紙、二十三・五×十六・七糎。見返し、金 お茶の水図書館蔵〔江戸中期〕写 綴葉装。料紙、 鳥の子。字

集上(中、下)」。 奥書(A)(B) と墨書、その右側に貼紙して「西行上人」と記す。内題「山家

である。 るお茶の水図書館蔵甲本、京大図書館蔵本のみにみられるもの 、[36)は上二句のみが記載されている。この現象は本書と次述す 本書は前述した第二類Cに欠く歌を本書もすべて欠き、

た歌群を欠くことも、 又、328(32)~34(33)、82(87)~83(85)という各一丁分の纒っ 第二類本を通してみられる特徴である。

本書はちょうど32(32)より改丁箇所に当っており、落丁祖本に

近きを思わせるものがある。82~83の落丁箇所については、各 本とも、落丁箇所直前の、82(80)詞書の前半「とかくのわさは てゝあとの事ともひろひて」と81(86)詞書「返し」が繋がって

しまっている。 さて、以上により本書の歌数は、陽明本より二九首少ない、

一五二三首である。

歌の排列も、第二類本Cに共通にみられる排列を示してい

る。

でも本書・茶甲・京の三本がより近似する本文を有している。 本文は、 しばしば他の第二類本Cと共通異文を見出すが、 中

富猪一郎」「東京林縫之助蔵書」(以上すべて朱印)。奥書(3)。印記「徳富文庫」「蘇峰清賞」「須愛護蘇峰嘱」「徳貼付「山家集上(中、下)」と墨書。内題「山家集上(中、下)」。出行「山家集上(中、下)」の 題簽、表紙左肩に金箔散し白紙短冊を

本書上冊には誤綴が存する。すなわち、上冊は二折より成るのである。

本文も、前述の如く天甲本とほぼ同一である。24(20)~57(57)部分を欠くため、歌数は一一六一首である。歌の異同、排列等に関しては、天甲本と同一であるが、上冊

なを長い計つから) 票色也送鳥女後以長氏、ニトニ・ハィー 京都大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写 一一冊

家集 第一冊終」とする。内題「山家集上(中、下)」。奥書(A) 八・一糎。墨付百四十丁。題簽、表紙左肩に金箔散らし白紙短冊貼付級葉装。料紙、厚手鳥の子。 毎半葉十行。 字面高さ約十八・八糎。見返し、水色・白・緑等にて水辺菖蒲蓮花等を描出。(六家集十冊のうち)縹色地縦縞文様裂表紙、二十三・八×十(六家集十冊のうち)縹色地縦縞文様裂表紙、二十三・八×十

四(1%)の各歌である。このうち48・49の二首は筑波大本と共通さらに三カ所に脱落がみられる。 それは、 45(46)、 49(48)、本書は天甲本・茶甲本などと同一系統に属するが、本書には

本より三首少ない、一五二〇首となる。し、23は本書のみにみられる脱落である。従って歌数は、

3/55く 497/31~ 20/32~ 28/30~ 127(25)・127(25)・27(25)・27(25)・27(25)・37(25)・497/31~ 20/32~ 28/30~

本文は天甲・茶甲本とおおむね共通するが、中には筑波大本右の四箇所の異同は、如何なる理由によるものか不明である。273(25)、四49(48)・505(42)・496(48)。

にになる。 くれて「たれたない」ので、4、3、5により、18(16)初句、子日して(他本「子日しに」) 15(13)第五句と本書のみにみられる共通異文もある。

院大本「おはえかし」等区々。) $\Omega(M)$ 第五句 ゆきしふくおはらかし(版本「をきとゝし」陽明本「すはへかし」学習木はなかりけり(他本「木そなかりける」) $\Im(\Omega)$ 第三句

又、イ本書入れが僅かになされている。

めり(陽明本「雪しまくめり」版本「雪しまく也」)

筑波大学図書館蔵〔江戸前期〕写 一冊

と墨書。内題「山家集上(中、下)」。奥書A(B)。付百四十一丁。題簽、表紙左肩に波雲形文様短冊貼付「山家集」葉装。料紙、鳥の子。字面高さ約十八・七糎。毎半葉十行。墨葉装。料紙、鳥の子。字面高さ約十八・七糎。 毎半葉十行。墨

に書写している。補写部分を歌番号で示せば辺(弱)~辺(¾)の補写部分が存する。この補写部分のみ毎半葉十一行乃至十二行る。本書には大量の脱落があり、四カ所五丁分にわたって別筆本書は、本来三冊本であったものを一冊に合冊したものであ

八首、計五丁分、五七首である。この補写部分の本文は版本の(脳)までの一丁分、八首、間(間)~117(18)作者までの一丁分、二丁分、三二首、82(80)~88(81)の一丁分、九首、111(196)~1120

それに一致する。

りである。 取の異同については、天甲・茶甲・京各本と共通である。 歌の異同については、天甲・茶甲・京各本と共通である。 歌の異同については、天甲・茶甲・京各本と共通である。

5(4の次)、 7(元)、 75(元)、 77(元)、 77(元)、

陽明本系に共通に欠く川(9の次)、羽(3の次)、籾(55の次)、館本のみにみられる現象である。

る。

さて、以上によって本書の所収歌は一四九一首、읞(紀)の重いない。見落しによるものであろうと推定される。及び第二類本のみに欠く歌읤(禍)については、補写がなされて

出分を含め、書入れ歌は八十一首である。

ところが、かかる本文の中に版本の本文がかなり混入してく 図(四)の次、□図(図)・図(図)・四(図)の順となっている。 本文についての共通異文がしばしば現われるが、中でも京本 の四本についての共通異文がしばしば現われるが、中でも京本 の四本についての共通異文がしばしば現われるが、中でも京本 と殊に親近する関係にあることは、前述のとおりである。 と殊に親近する関係にあることは、前述のとおりである。

るべきものと筆写者により判断された箇所についてであろう、よく見ると、本書の本文を版本と対校し、恐らく版本本文に拠版本と同一の本文を示すことがしばしばあるのである。これは本文のみられる場合があるが、それとは別に、本書のみ単独に本二類本C全体に、陽明本の本文とは異なり、版本と同一のることが、本書の大きな特徴である。

関係を示しているのである。 二類本Cの本文と言うべく、就中京大図書館本と最も近似する種の校訂本文となっているが、本書の本来の形は、あくまで第のである。従って、全体として双方の本文を折衷した形の、一該当部分が削り取られ、版本によって書き入れが施されている

5に、本書で改訂を加えられたと思われる本文の 例を 掲げ

が、版本によって改訂されているのである。すなわち、もともと他の二類本と同一であったと思われる本文

二類本「月よやかて」)

本校合がなされて、全体として版本の本文の大量の流入をみる分及び脱落歌が版本によって補入され、さらに版本によってイかかる次第で、本書はまず第二類本Cの本文が書写され、そイ本もやはり版本である。

な歌がある。 その象徴的ともいえる一例を挙げれば、巻末近くに次のように至ったものである。

にしのことはにふさねたる哉(タム)1555かひありてねかはん国へ行へくは

たため、かかる間違いを生じたものであろう。 おかる間違いを生じたものであろう。 これは、天甲・茶甲・京の各本と同様、上二句しが、版本は、次の555(54)の下二句を目移りによって誤刻しているのである。これは、天甲・茶甲・京の各本と同様、上二句しるのである。これは、天甲・茶甲・京の各本と同様、上二句したか、版本は、次の555(54)の下二句は、陽明本では「にしのかとよりさとりひらかん」

第三類本

【函架番号 九一一・二三・イー(A八六○)」A 天理図書館蔵〔江戸前期〕写 三冊 乙本

「温故堂文庫」(朱)、「和学講談所」(朱)。下)」と墨書。 内題「山家集上(中、下)」、奥書(A(B)()。 印記中冊三十八丁、下冊四十七丁。表紙左肩に題簽「山家集上(中、字面高さ約二十二・五糎。 毎半葉十一行。墨付上冊四十四丁、字面高さ約二十二・五糎。 毎半葉十一行。墨付上冊四十四丁、字面高さ約二十二・五糎。

巻末に一括補入している。但し、右書入れ歌のうち37(31の次) 123(127の次)の各歌については、本来の位置を注記したうえ、 付されている。版本独自歌の残りの||1(100の次)、||6(110の次)、 5 11 17、37を除く十六首には、「付帋」等の注記が

については、39(33の次)の次に書入れている。

存するほか、85(61)の版本と同じ位置にも書入れられて、重出 版本系写本によっているため、86(67)は、66(61)の次に本行に いる。この二首を欠くのは、本書と神宮本である。補入歌は、 又、77(75)、28(28)の二首を欠いて、これを書入れ補入して

入れられ、さらに18(16)の次すなわち、版本と同じ位置にも、 「付帋」と注記して重出補写されている。 又17(16の次)は、同位置に書落されたものが17(15)の次に書 する結果となっている。

17を含め、書入れ歌は二七首である。 以上によって、本書の所収歌は、一五五〇首、重出する倊、

本に共通にあらわれた歌順であった。四は、本書独自の排列で 本書と神宮文庫本のみにみられるものであり、闫は第二・三類 四33(25)・32(24)の排列が異なっている。このうち、⑴、闫は、 (27), (24), (45)歌の排列については、陽明本と比較するに、 ①23(28)・22 三・四には、順序を正す注記がある。

写校合早尤/可為證本乎/干時文禄三年季春上澣/玄旨判」と わち仏田の奥書のあとに、「此山家集密々申出/禁裏御本遂書 本書は、いわゆる玄旨校本と呼ばれている一本である。すな

これによれば、玄旨(細川幽斎)は、禁裏御本を書写校合し

第三類本の現存諸本には、版本独自歌の多くが、 余白、 ているのである。本書は、その転写本である。

にしない。 らかな誤りが版本系本文によって正されているかの如き観を呈 出すことが一つの特徴である。それは多く、陽明本系本文の明 本の本文の中に、ところどころ版本の本文に一致するものを見 だ、かゝる校訂が、いかなる段階で行なわれたか、未だ審らか も言うべく、全体として、かなり良質な本文となっている。た している。第三類本は、そのような意味で、一種の校訂本文と いは本行に書入れられているが、本書の本文を見るに、第一類

との間に直接の書承関係は認められない。 第二類本Cにも、版本系本文の流入がみられたが、第三類本

は省略) 次に、 本書に特徴的にみられる本文の例を掲げる。

陽に同じ)、4(4)第五句 かやうつすらん (版「かやうつ 「とくくくむめの」、筑及び第三類本は版本に同じ、その他は みけん」、陽「すみれつみてん」、市及び第三類本は版に同 をさへに」、陽「こゝろをさらに」、第三類本は版に同じ、他 同じ、他は陽に同じ)、8(82)第二句 心をさへに (版「心 すらん」、陽「かやにほふらん」、筑・第三類本・多は版本に 43(4)第二句 よるくむめの (版本「よるく梅の」、 陽に同じ)、16(59)第五句 すみれつみけん(版「菫

立」、陽「しはのわかたち」、第一類本C、第三・四類本は版 陽に同じ)、四(四)第五句 ゑくのわかたち(版「ゑくのわか 陽「もろともに」、天乙・神宮・書丙・多は版に同じ、 他は 他は陽に同じ)、タ4(タタ)初句 このもとに(版「木のもとに」、 同じ、他は陽に同じ)、88(83)第五句 みたかな」、陽「わかおもひ哉」筑及び第三類本は版に同じ、 「月そやとれる」、陽「月そすみける」、 第三類本・筑は版に その他は陽に同じ)、42(36)第五句 我涙かな(版「我な 月そやとれる(版

り取って、版本の本文を書入れているからである。) しば版本と同一であるのは、前述した如く、本文を部分的に削 のみが、かかるパターンを示すことがある。(筑波大本がしば とである。又、例示しなかったが、本書と次述する神宮文庫本 文に一致するときに、第三類本が、版本と同一の本文を示すと 右に多くみられるパターンは、他の多くの伝本が陽明本系の本

に同じ、他は陽に同じ)

とも注意される。 けぬ也けり」、版・筑「明にけるかな」、他本「あけぬ成る 19(17)第三句 あひたれは (他本「あひぬれは」) 72(8)第 さらに、本書と神宮文庫本のみにまま共通異文がみられるこ 他本「秋のよの月」) 329(323)第五句 まかふ心を(神宮「まかふ 心を」、かょふ = かつまたの形 かつまたの形 334(328)第五句 (神宮「かつまたの池」心を」、他本「かよふれ あけぬ也けり(神宮「あーにける哉

> は欠く歌であるから、版本からの書入れと考えられるが、その われる 概してかかる共通異文には、誤写に基づくものが多いように思 次に、本書に於ける書入れ補入歌をみると、本来陽明本系に

本文は版本のそれとはやや異っている。 次)第二句 友にあふへき(版「君にあふへき」) 37(34の次)初句 香こそまつ (版「香にそまつ」) 491 (481の次) 420 413

第五句 そてにたくへる(版「袖にまかへる」) 537 525 の次)

第五句 よ半の初雪 (版「よはの白雪」) 85(99の次)初句

なきかけを(版「なきあとを」)

本文を有する版本系の伝本が存したのであろう。 伝本の中には見出されない。書入れの行われた当時にはかかる 53が三手本に一致する以外、かかる本文を有するものは、 --- 416 --

が存する。 次に、イ本書入れであるが、本書には少くとも三種の書入れ

いる。 二類本系の本文―市岡氏本にごく近い一本によって行なわれて 朱にて書入れのなされたものである。これには「一」と注記の 神宮文庫本と共通するものである。その二は、上巻にみられる なされたものと、注記のないものとがある。その書入れは、第 その一は、 原写本に既に存したと思われるもので、次述する

と」、他本「つれくに」) 48(45)第三句 つれくに(筑を除く第二類本で「つれく」 10(97)第四句 身ならすは(第二一で(朱)

類本A及び筑を除くC「身ならては」、他本「身ならすは」) 窓(窓)第四句 荻のをとこす(版・筑・多「荻の音する」・ 市「荻の音こそ」、他本「をきのをとこす」) आ(आ)初句 よひのまの(市「よひのまも」、他本「よひのまの」同第五句 を(朱) 影にたはるム(市「影そたはるム」、他本「影にたはるム」) を(朱)

かの如き趣を持つものとなっている。文が書き加えられ、全体として、『山家集』の本文を総覧する文がみられ、さらにイ本校合によって、版本及び第二類本系本本書は、以上にみた如く、本文自体に版本系本文と同一の本

るものとしないものとがある。

書と天乙本のみに欠く歌である。

神宮文庫蔵〔江戸前期〕写 三冊

記「林崎文庫」(朱)。 「山家集上(中、下)」と墨書。内題「山家集上(中、下)」。印中冊三十八丁、下冊四十七丁。 題簽、 銀泥唐草模様白紙短冊糎。字面高さ約二十四糎。毎半葉十一行。墨付上冊四十四丁、糎。字面高さ約二十四糎。毎半葉十一行。墨付上冊四十四丁、

なかろうか。

本書は、陽明本に欠く版本独自歌二十三首をすべて欠くが、を捺す。 を捺す。 大神宮林崎文庫以期不朽/京都勤思堂村井古巖敬義拝」の朱印太神宮林崎文庫以期不朽/京都勤思堂村井古巖敬義拝」の朱印太神宮林崎文庫以期不朽/泉郡四年甲辰八月吉旦奉納/皇

(32)(17)の次)・11(9の次)・37(34の次)・17(17の次)・40(18の次)・41(18の次)・41(18の次)・41(18の次)・41(18の次)・41(18の次)・50(17の次)

至祖本で補入されたものが、転写の過程で本行化されたのでははなく、四(四)の次に書写されている点より推すと、依拠本乃自歌四(170次)が本行に存する。この歌が版本どおりの排列で細字で補入されている。さらに本書には、陽明本に欠く版本独細字で補入されている。さらに本書には、陽明本に欠く版本独細字で補入されている。200は詞書を欠いているが、同部分がのみ存し、200(20)歌及び20(20)詞書を欠いているが、同部分がのみ存し、200(20)歌及び20(20)詞書を欠いているが、配言を除く十右の二十一首の補入歌のうち、5、11、37、170、200を除く十右の二十一首の補入歌のうち、5、11、37、170、200を除く十

歌の排列については、すべて前述の天理図書館蔵乙本に一致である。 以上によって、本書の歌数は一五五○首、書入れ歌が二一首

してみる。(括弧内は天乙本)る詞句が存する。両本の間に書承関係は認め難い。両本を対照る詞句が存する。両本の間に書承関係は認め難い。両本を対照本文に関しては、天理乙本とほぼ同一であるが、僅かに異な

15(13)第五句 しかの山道)、44(30)第三句 月かりの (54)第五句 かりはかりにかりにかりにかりにかりにがり、15(34)第五句 かりにして)、17(15(34)第五句 かりした(4)第五句 かりした(5)第五句 かりした(5)第五句 かりした(5)第五句 かりした(5)第五句 なしはてょ (わけなかりにが)第五句 はりなして、(わけなりに)第五句 はりなして、(わけなりに)第五句 はりないの山道)、44(30)第三句 (15)第五句 しかの山道)、44(30)第三句 (15)第五句 しかの山道)、44(30)第三句 (15)第五句 はりがいる (15)第五句 (15)第五句 というには、15)第五句 には、15)第五句 には、

本書には、イ本書入れ、無注記の書入れ、見消ち等が存す本書には、イ本書入れ、無注記の書入れ、見消ち等が存す本書には、イ本書入れは、無法のものである場合は、イ本は、版本系の本文であり、本文が版本系のものである場合は、イ本はは、版本系の本文であり、本文が版本系のものである場合は、イ本はは、版本系の本文が書入れられている。

本「玄旨」とあるところを本書は「玄旨判」としている。(書本「玄旨」とあるところ本書は「――下澣」と作り、諸禄三年季春上澣」とあるところ本書は「――下澣」と作り、諸本三年季春上澣」とあるところ本書は「――下澣」と作り、諸本「玄」、書落としたものであるが僅少である。他本にある「本云のである、独自の書入れもあるが僅少である。 とれは本書が天乙本と同一の一本によって対校されているのである、独自の書入れもあるが僅少である。 とれとは別に、見消ち、無注記の書入れがかなり多量に存す これとは別に、見消ち、無注記の書入れがかなり多量に存す といる。(書

B 書陵部蔵〔江戸前期〕写 三冊 丙本

「函架番号 五一一・一〕(桂宮本)

と愚情。内頂「山家集上(中、下)。更情以あり。十二丁。題簽、表紙左肩に白紙短冊を貼付「山家集上(中、下)」糎。毎半葉十二行。墨付上冊四十一丁、中冊三十五丁、下冊四糎。毎半葉十二行。墨付上冊四十一丁、中冊三十五丁、下冊四本為色無地表紙、二十六・六×二十・五糎。字面高さ約二十三

る。 目録によると智仁親王写と伝えるが、三冊それぞれ別筆であと墨書。内題「山家集上(中、下)」。 奥書(4)(8)(で)

いる。以上によって、歌数は陽明本より十七首多い一五六九54(53)の各歌を欠いているが、うち87、54歌の二首を書入れてのみ、欠いたまま補入されていない。その他34(33)、87(82)、のみ、欠いたまま補入されていない。その他34(33)、87(82)、

の次)、23(27の次)の二首は貼紙して補入している、18(15の次)

首、書入れ歌四首である。

966。(松)の排列が第二・三類本と共通するほかは、陽明本と同じで、松)の排列が第二・三類本と比較した場合、 40(43)・ 49(45)・ 48

本文は茶乙本に近似し、陽明本本文の中に版本系本文の混入

丙本も「玄旨在判」とする。)

合、あるいはその逆の場合、さまざまである。陽明本系本文に一致するときに同Bが版本系本文に一致する場文が共通に版本の本文に一致することもあれば、第三類本Aがした形態を示す。独自異文は比較的僅少である。第三類本の本

書丙(茶乙) 天乙(神) 版本 陽明本

85(8)第四句 春はまちし 春をまちし 春をまちし 春はまちし

8(8)第五句 なくやちり なくや散な なくやちる なくやちり

№(億)第四句 つみはへし つみけらし つみけらし つみはへし なり めり り り しょくしょく めり なり はらしょく ゆきしまく 雪しまく也 雪しまくめ

如き例によっても知られる。(傍記は版本)までもないが、版本による直接の書入れではないことは、次の本行化している書入れ補入歌が版本系本文であることは言う12(14)初 句 わりなしや わりなしや わりなしや わりなしや

しらむにしるし夜はのはつ雪33月いつる折にもあらぬ山のはの

であろう。 祖本に於て書入れられたものが、転写の過程で本行化したもの

る。 本書独自の脱落歌を補入した80(88)は、陽明本系の本文であ

冊)、「続校了」(下冊)と記している。 本書に用いられたイ本・イ本校合もなされていて、各冊巻末書脳に「一校了」(上、中)

5

は、版本である

お茶の水図書館蔵〔江戸後期〕写

下)」。奥書なし。印記「徳富氏珍蔵記」(朱)「加持井御文庫」「十・六糎。字面高さ約二十二糎。毎半葉十二行。墨付上冊四十丁、中冊三十四丁、下冊四十一丁。外題、元表紙上中冊左側十丁、中冊三十四丁、下冊四十一丁。外題、元表紙上中冊左側十丁、中冊三十四丁、下冊四十一丁。外題、元表紙上中冊左側十丁、中冊三十四丁、下冊四十一丁。外題、元表紙上中冊左側十丁、中冊三十四丁、下冊四十一丁。外題、元表紙上中冊左側十丁、中冊三十四丁、下冊四十一丁。外題、元表紙上中冊左側十丁、中冊三十四丁、下冊四十一丁。外題、元表紙、一十七・四×茶褐色無地元表紙。薄茶色刷毛引模様改装表紙、二十七・四×茶褐色無地元表紙。薄茶色刷毛引模様改装表紙、二十七・四×茶褐色無地元表紙。薄茶色刷毛引模様改装表紙、二十七・四×

いる。又、陽明本独自歌13の次(田)が本書にはみられない。のうち、5(4の次)・11(9の次)・37(31の次)・17(71の次)・37(31の次)・42(43の次)・43(53の次)・52(12(12)の次)・52(13)の次)・52(13)の次)

さらに、本書のみに欠く歌は、29(24)・48(41)・64(44)・79

818(80)歌が89(84)詞書のあとに重出する。不用意の重出であろ

(朱)「盛胤之印」(方朱)「円融蔵」(朱) 。

(鉛)・77(59)・99(95)・103(88)・10(109)の各歌であり、 341 335

五六三首であり、重出歌を一首含む。 は書丙本と本書が欠いている。以上によって本書の歌数は、

排列に関しても、やや特異な形態を示すものが多く、陽明本

1299 446 (458) · 457 (四) 111 (187) · 1115 (188) · 1130 (188) · 1297 (179) · 1115 (189) · 113 (189) · 113 (189) · 114 (189) · 115 (189) · 116 (189) · 117 (189) · 117 (189) · 118 (189) · と比較すると、一77(75)・76(74)、二40(43)・45(45)・45(45)、 (涩)、八55(14)は15(16)の次、の各歌が排列を異にしている。

が、他は本書独自のものであり、欠落歌の多いことと併せ、本 書の書写態度にやや杜撰なものが感じられるのである。 右のうち、口は、第二・三類本に共通にみられるものであった

ない。本書も、版本系独自歌が大量に本行に存するが、祖本に り、あるいは、その逆であるケースも散見する。独自異文は少 が版本の本文に一致するときに、本書が陽明本本文に一致した と考えられる。 おいて書き入れられたものが、転写の過程で本行化されたもの 本文は前項に記した如く、書丙本に近似する。但し、書丙本

ると、依拠本にすでに存したものであろう。 イ本書入れも僅かに存するが、書丙本に一致するところをみ

毎半葉十二行。墨付百三十一丁。但し、末十一丁は、本書に見 薄茶色無地表紙、二十七×十九糎。字面高さ約二十一・五糎。 多和文庫蔵〔江戸後期〕写

は、

殊に版本の本文が多量に流入している。

₩

し白地裂短冊を貼付「山家集」と墨書。内題「山家集上(中、 下)」。 奥書は校本所載のものを掲ぐ、 えざる異本所収歌を収録している。題簽、表紙左肩に金箔散ら (A)(B)。 印記「香木舎文

805(79の次)の二首を除く二十一首には「無校本」などの注記を 三首をすべて本行に有する。そして、それらのうち羽(76の次)、 特異な形態を有する一本である。陽明本に欠く版本独自歌二十 庫」(朱)、「集古清玩」(方、緑印)。 本書は、陽明文庫本と版本を折衷したかの如き観を呈する、

は、陽明本と版本では排列を異にしている。これらの三首につ 20(65)は、版本では49(40の次)に重出し、86(61)と88(付している。無注記の二首は書落したものであろう。

列に従って本行に重出している。以上によって、本書の歌数は いては、本書では、陽明本本来の位置に存するほか、版本の排

一五七六首であり、三首重出している。

次に歌の排列に関して、 陽明本と比較すると、

(-) 460 453

のであり、口及び回は版本と同一である。又四及び団は本書独 と異なっている。右の□の排列は、第二・三類本に共通するも 459(45)・458(452)、 □ 78(64)・70(63)、 □ 72(78)・72(77)、 四 13(28)→29(28)の次、国33(33)・13(33)の各歌が陽明本の歌順

明本と版本を混淆して一種の校訂本文を作成していったかの如 き趣きを有する一本である。□及び回の排列に該当する周辺に 本書は全体として、如何なる経過を辿ったかわからぬが、 自の排列である。

るときは陽明本本文をそれぞれ傍記して、対照してみることにその本文が陽明本に一致するときは版本本文を、版本に一致す独自異文は少数にとどまる。次に、本書の本文の例を掲げ、

うき世をいとふ心ある身そ(18) に(陽) に(陽)

またれぬ鳥のねそきこゆなる(86)とも(8)

189ほとゝきすきかて明ぬとつけかほにな(版)

34おひも世ぬ十五のとしもある物を

哀をそへてすめる月かけ(34) 39虫の音・かれ行のへの草むらに の原(版)

46年のねにつゆけかるへき袂かは さのみぬ(版)

Mさらはたゝさらてそ人のやみなまあやしや心物おもふよし(48)

さて後も又さもあらしとや(別)
さはイーやあらしとや(別)

(詞書) 神力品於我滅度後の文を(恕)(湯明本・第四句「さてのちもさは」)

可湯) 1296忘られんことをはかねておもひにきから(版)

本文を併せ、校訂本文を作成した観を呈している。はないかと思われる例もあるが、全体的にみると、両者の優良が共存するものもある。中には、粗悪本文の方を採用したので右にみられる如く、一首のうちに陽明本系本文と版本系本文なとおとろかす涙なるらん(アタ)

本書にはイ本書入れがある。校本は第一類本B、すなわち、るようで、用字に至るまで殆んど一致している。

版本独自歌二十三首の書入れは、版本から直接行なわれてい

なわれている。
なわれているわけではなく、下冊に殊に丁寧に行の本文を採用した箇所に、校合がなされている。但し、全体に書陵部蔵乙本にきわめて近い本文を有する一本である。版本系をわれている。

いられた校本が書乙本にきわめて近似する一本であることを証いられた校本が書乙本にきわめて近似する一本であることを、本書に用が、書乙本と本書にのみみられるものであることも、本書に用られている。奥書の中にある「見隆信朝臣集也」の「見」の字

奥書は書陵部蔵乙本と同一のものが、「校本云」 として掲げ

、むしろ版本に近似している。本書は、形態的には、陽明本系の特徴を備えているが、行格

松屋本系諸本

平井卓郎氏蔵版本書入れ本

郎氏及び高城功夫氏が詳しく紹介・考察をされている(前掲)。 書入れによって、その大凡を知ることができる。 量に有し、陽明本系、版本系とはかなり性格を異にする別系の 一本として、注目されるものである。本書については、平井卓 本書の成立に関しては、『壬二集』 上巻巻頭に記されている 本書は、版本に書入れされた元の本が、他に所見なき歌を多

略む為のわたくし心にして此書入に限りたる仮そめことゝしい。 りし年月などもなければ。いつばかりの写とも詳には知りか 師翁高麗蔵本に。 玉吟集の古写本あり。 又山家集の古写本も るべし。(後略) 玉吟集も。共に延宝三年の写本なることは論なし。(中略) たかれど。此書と一筆なる。山家集のかたには。延宝三のと の最うるはしき事。云むかたなし。玉吟集のかたは。写得た 有て。共に同一筆の本にして。筆者の姓名を記さねど。其書 一、師翁の本は。今。松本といひ。(中略)是ことしげきを しきさらきの比うつし侍る也。とたしかに奥書もあれば。此

得て校合なしをへぬ たか辺のやのあるし源の都止布

文政十年ひのとの亥のとしみな月のころ山家集とともにかり

そして、『山家集』上巻巻末には、

と記されている。すなわち、延宝三年二月頃書写した旨を記し 延宝三のとしきさらきの比うつし侍る也

松屋) 旧蔵本ということで、松屋本と通称されているのである。 れによって、原本の姿をある程度窺うことができる。与清(号・ それが本書である。原本は伝わらないが、版本への青墨の書入 の古写本を借用し、『山家集』版本に書入れ校合を加えたもの、 である「たか辺のやのあるし源の都止布」が文政十年六月頃こ た奥書のある古写本を、髙田与清が所持していたが、その門弟

本書には注目すべき奥書がある。

勢にそ侍なるたつねとりてかゝるへし なくみたれ侍り哥のかすもいま三十一首たらす正本はなら伊 たるなり但百首をのそかれたり此山家集本歌の次第もしとけ 山家集哥三千百十二首也其中より三重集をはえらひいてられ

ものであったことを知ることができる。 いる。『山家集』の原形が、現存諸本の約二倍の規模を有する この後に、「師翁蔵古写本如此有奥書」という注記が付されて

歌、計三首を有する。 独自歌六首のうち、23の次(29)、91の次(87)、53の次(51)の各 あって本書に欠く歌は三八七首である。又、版本に欠く陽明本

さて、本書の歌数と版本のそれとを比較してみると、版本に

については、諸家により、本書初見歌として扱われている。ま 本書初見歌は六六首である。 24(36)、56(55)、14(124)の各歌

したのは松屋本である。) でいれのは松屋本である。) でいれる、 はいない、 でいた、 参考までにそれらの歌を掲出する。 (本文は版本、 傍記同多き歌として扱うべきものと考え、別歌としては計算しなかあるが、版本の歌に重ねて校異がなされている以上、詞句に異さに初見歌として見なければならないほど詞句に大きな異同が

21みまくさに原の小薄しかふとてはらのメすすきかりをきて

563さゆれとも心やすく・・聞あかすをさむみ声にそしけく関ゆなれたもからん(23)をしとあせぬとしかおもふらん(23)

河せの千鳥友くしてけり(55)

重出歌は一首、42(44)が108(202)の次に重出する旨、眉上に書いて、こことに言いていた。

一二五二首である。 以上によって、歌数は版本より三八七首少なく、七十首多い 入れがある。

次のような例によっても推測できる。ただ、延宝三年奥書本にすでにかなりの脱落があることは、

50(例)は、「長楽寺にて夜紅葉を」の詞書のみあって、50(例)に、「長楽寺にて夜紅葉を」の詞書のみあって、50(例)に、50(例)に続いてしまってい歌~50(例)詞書までを欠き、すぐ50(例)歌に続いてしまっていい。

行の歌になってしまっている。 又、ワ3(ス3)為業の返歌は、「返し」の語が脱落し、ともに西

つけてありて/肩に 此間哥落たる敷」と記している。「此に「此こと書は兄」と注記し、さらに眉上に、「此二丁前へ書入れがある。そして100(103)~113(100の次)歌を欠き、114(109)詢書ふ歌より末を書つゝけたりされと其歌の詞書はなし」との書ふ歌より末を書つゝけたりされと其歌の詞書はなし」との書いば(103)の次には、上述した42(44)の重出のことを記した後、103(103)の次には、上述した42(44)の重出のことを記した後、103(103)の次には、上述した42(44)の重出のことを記した後、103(103)の次には、上述した42(44)の重出のことを記した後、103(103)の次には、上述した42(44)の重出のことを記した後、103(103)の次には、上述した42(44)の重出のことを記した後、103(103)の次には、上述した42(44)の重出のことを記している。「此

である。

間哥落たる歟」は原写本にあったものであろう。

歌(16)歌、199(18)歌、17(15)詞書などには、延宝三年奥書本所蔵(16)歌、199(18)歌、17(15)詞書などには、延宝三年奥書本所のる程度考えられよう。 88(81)詞書、24(92)詞書、又、本文に書入れをしながら、88(81)詞書、24(92)詞書、25(92)

(33)(33)・33(34)、(33)(36)・38(38)の各箇所であり、版本の(54)、三54(55)・53(55)、四14(33)・35(34)、 口 57(33)・54(35)・53(55)、四14(33)・35(34)、 口 57(35)・53(55)、四14(33)・35(34)、 口 57(35)・58(55)、四14(33)・35(34)、口 57(35)・58(35)・

それに一致するのは、(148(42)・49(41)、(178(64)・79(63)の

ない。が、排列に関しては全体的にみて、版本よりは陽明本に 数首を欠いていて、どちらの排列によるとも決めることができ 二箇所である。他の箇所については、内に含まれる歌一首乃至

近いものであるといってよいであろう。

明本に近い形態を有するものであることを証するであろう。 こと、内題が「山家集」であること、版本では63(60)の前にあ みられないこと、などの幾つかの徴証は、本書が全体として陽 左注が存すること、94(99)作者名の下に「長門入道」の注記が 様6(62)の前に位置していること、版本には欠いている87(82) る詞書「花のうたあまたよみけるに」が、本書では陽明本と同 次、□127(125)・126(121)、□184(181)→20(196)の次、四32(32)・327 (31)、田89(85)・88(87)・89(87)、51358(134)→136(1348)の次、 さらに、陽明本に欠く版本独自歌二十三首を一首も含まない 他に本書独自の排列を示すものには、 □17(11)→88(85)の の

> 写・誤刻の類を含んでのものであるが、大方の傾向は示してい 陽明本に一致するものが三百カ所余り、そのいずれとも異るも かを調べてみると、版本に一致するものが、三百十カ所余り、 で本文を異にする箇所について、本書がそのいずれに一致する しえぬ独自の本文を有している。いま、試みに陽明本と版本と 各歌がある。 のが八十カ所余りである。この数字は両本に大量に存する、誤 ると思われる。すなわち、本文に関しては、陽明本と版本のい 次に本文をみると、陽明本系とも版本系ともいちがいに総括

集の本文と一致する場合がしばしばみられる。 中集』、『西行上人集』などにも入集している場合、それらの歌 ていることは注意すべきであろう。 しかも当該歌が、『山家心 ともあるが、多くの場合、正しいと思われる方の本文に一致し

ずれでもない、いわば中間的傾向を示しているのである。

本書も時に、明らかに誤りと思われる方の本文に一致するこ

212(27)第四句 247 242 初 98(95)第五句 %(33)初 43(40)詞 旬 我はおしまん 老つとに 露のほる むなてにすくる いせのにもり山 本 おもひいてに 伊勢にもりやま むなてにすくる かをはおしまん つゆのちる 陽明本 我はおしまん 露のほる むなてにすつる 老つとに いせのにしふく山

版

備

30(25)第五句

あきせみのこゑ

しかあはれなる

鹿のねたえぬ 秋の蟬かな

山家心中集、西行上人集、本書に同じ

山家心中集、

西行上人集、

本書に同じ

山家心中集、西行上人集、本書に同じ

44(43)第四句

鹿あはれなる 秋蟬のこゑ

893(878)第二句 749(734)第五句 83(88)第四句 やみにかこへる つらなる袖に かたみなるらめ やみとかいへる つらなるそてに かたみなりけれ やみとかこへる つらなる軒に かたみなるらめ に同じ 山家心中集は本書に同じ、

100(91)第五句 933(919)詞 うくひすのこゑ ……そうから うくひすのこゑ たにの鶯 ……僧綱

1385 (367)第五句 1258 (1240)第五句 (注・『山家心中集』は、宮本家本、『西行上人集』は藤岡本に拠った。) 玉とまらまし 色はみえける 玉とちらまし 色もみへける 玉とまらまし 色はみえける

西行上人集は陽明本

西行上人集「僧綱」

山家心中集、 山家心中集、 西行上人集、 西行上人集、 本書に同じ 本書に同じ

おりである。 一方、本書には独自異文が多いことも従来指摘されていると

書の如くあるのが正しいのであろう。かかる有益な本文もあれ 条には兼賢の名がみえ、『山家心中集』にも同様にあるから、 綱補任)であり、僧綱補任抄出(群書類従巻五四)長寛二年の 系「源賢」とあるが、源賢は寛仁四年入滅(彰考館蔵二冊本僧 93(タリ)詞書「阿闍梨兼賢……」は、 版本系「兼堅」、 殆んど意味をなさないまでの粗悪な本文も多量に存する。 陽明本

れたものではなかろうか。

しかしながら、本書は伊藤嘉夫氏が指摘されている如く(「古

中で分冊されており、その分冊が如何なる理由によってなされ で、最も注意すべきものの一つであることは、疑いない。 たか未詳である。恐らく分量的に、ほぼ等量になるようになさ と同様であるが、 それぞれの「本」「末」は、 秋歌と雑歌の途 されている。「上」が四季及び恋、「下」が雑歌である点、版本 なお、本書は「上本」「上末」「下本」「下末」の四冊に分冊

に」とある注記が、本書には記されていないこと、など注目す べき本文を有しており、本書が『山家集』の原型を探るうえ 本書では「恋百」とあること、337(38)歌の次に諸本「又ある本 となっていること、他の諸本「恋百十首」となっているものが 鈔本山家集残闕本について」前掲)、「俊成」の名が「あきひろ」

> 縹色無地表紙。 二十五・六×一八・一糎。 字面髙さ約二十一・ 天理図書館蔵竹柏園旧蔵〔江戸初期〕写 (函架番号 九一一・二三・イ六五(A八七九) 残闕本

書、平井氏蔵版本書入れ本にほぼ同じ。 五糎。毎半葉十行。墨付五十二丁。外題・内題ともになし。奥

本書は、平井氏蔵本に先立って発見紹介された、松屋本系統

にほぼ相当する残闕一冊のみである。に属する一本である。但し、現存するのは、平井氏蔵本「下末」

する。他はすべて一致する。従って、本書の歌数は三四六首でいていた個(似)、53(51)、53(52)、54(53)、55(54)の各歌を有分を欠いたのであろう。平井氏蔵本と比較した場合、同本に欠如く(「松屋本『山家集』について」、前掲)、「下末」の初一丁本書は、112(68)詞書途中以下を収める。高城氏の指摘される本書は、112(68)詞書途中以下を収める。高城氏の指摘される

同じ)の歌順である。置していた点は、平井氏蔵本と異なり、版本どおり(陽明本も一カ所、平井氏蔵本に特徴的であった33(34)が33(34)の次に位歌の排列についても、おおむね平井氏蔵本に一致する。ただ

ある。

ている以外は、平井氏蔵本と同一内容である。奥書も、平井氏蔵本「本書云」が本書で「本書本云」となっ本文も小異はあるが、おおむね平井氏蔵本に近似する。

する試みが、常に行なわれたのである。

結

『山家集』は西行歌集の中で、最大の歌数を有するものであのでも過言ではあるまい。 現存伝本のいずれもが近世以後の書写・刊行にかかるもるが、現存伝本のいずれもが近世以後の書写・刊行にかかるものでも過言ではあるまい。

しかるに、版本系本文も又、西行と同時代の書写と見做され

ことは上述したとおりである。に比して、必ずしも粗悪な本文ということはできないであろうる『山家心中集』宮本家本本文に一致するものが多く、陽明本

あった。陽明本系本文の誤りを、版本の本文によって正そうとは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものでは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものでは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものでは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものでは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものでは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものでは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものでは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものでは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものでは、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものである。第一類本との首は文字では、絶えず版本系本文との間事実、陽明本の伝流過程に於ては、絶えず版本系本文との間事実、陽明本の伝流過程に於ては、絶えず版本系本文との間事実、陽明本の伝流過程に於ては、絶えず版本系本文との間事実、陽明本系本文の誤りを、版本の本文によって正そうと

陽明文庫本は、同系類諸本の中でも、最も源流に近い位置に という点では、むしろ陽明本と本文を共有する学習院大学ないという点では、むしろ陽明本と本文を共有する学習院大学ないという点では、むしろ陽明本と本文を共有する。誤写が少ないという点では、従来より指摘されているとおりであ立つものであることは、従来より指摘されているとおりであ

版本を遡り得る本文を有しているものと思われる。そのようなるに、版本系諸本の中では、三手文庫本が比較的誤り少なく、れが従来、版本が重んじられなかった最大の理由である。しか陽明本に誤写が多く存した如く、版本にも又誤りが多い。こ

き一本であろう。 意味では、三手文庫本が、版本系諸本の中では、最も注意すべ

に一致する例を見出すのである。 系の三手文庫蔵本、殊にその下巻には、しばしば松屋本の本文 る手がかりとなる有力な一系類に松屋本があった。そして版本 は、両系類のほゞ中間的な性格を有し、『山家集』の原型を探 さらに、陽明文庫本に近い形態を有しながら、本文に関して

又、西行と同時代まで遡り得る本文を有するものとして、注意 意されない現状は、再検討される必要があるであろう。版本も する必要があると考えるのである。 ともあれ、陽明文庫本のみが重んじられ、版本がほとんど注

(昭和五十六年七月稿)

印刷所入稿後、次の一本を閲覧することができた。

高知県立図書館蔵**〔江戸後期〕写** 二冊

歌集/西行上人 上」と墨書。 内題「山家和歌集上(下)」。 印記 十三丁。 表紙左肩に打曇文様白紙短冊を添付、「六家集 高さ約二十·五糎。 毎半葉十一行。 墨付上冊五十一丁、下冊七 「山内文庫」。 88(43)歌及び 89(44)詞書を欠き、 縹色無地万字つなぎ空押表紙、二十五・七×一八・二糎。字面 排列は版本に同じ。版本による写本。 歌数 一五六八 山家和

付表凡例

一、付表一・二・三は、掲出諸本の異同を略表記したものであ

一、諸本の異同は、版本を基本とした。従って、 は、私に付した版本の通し番号であり、() 内に陽明文庫 掲出した番号

、一覧に供する為に、諸本並びにその異同については、 次の

本(私家集大成本)の番号を付して対照した。

略記号をもってこれに代えた。

□諸本略記号→本文三七四~三七五ページ参照

口異同略記号

あるものに限り、Xffを用いた。)、●その他の書入れ歌、後補せる版本収録歌、(上記補入歌中、「付紙」等の注記の(版本非収録歌、×版本収録歌にして当該本非収録歌、X

は、※を付し、備考欄に記した。 又、上記略記号以外に注記する必要の生じたものについて

には、その排列を上欄に掲出した。そして、上掲した排列 次に、排列に関して、版本と異なる排列がみられる場合

と同一の場合は、「同」と記した。

著しいため、別表を設けた。 東北大学附属図書館蔵甲本上巻については、排列の異同が

版本番号(陽明本番号)	長 国 甲 乙 丙 丁 都 甲 静 神 米 田	想 我 東 東 三	備
111(10)		×	
1111 (11)		×	
11年(11日)		×	
二人(二六)		×	
四八(四五)	* (×)		欠き補写(四八詞書はあり)(志丙)四八歌より四九詞書まで
五七(五三)・五六(五四)	同		
八三(八○)→九○(八七)の次	同		
九二(八九)~一〇〇(九七)		×	
三の次 ()	*		みねなる花は…」を書入れ(都)陽明本独自歌「よしのやま」
一二七(一二五)→一三三(一三一)の次	同		
一三〇 (一二八) →一三二 (一三〇) の次	同		
一三七(一三五)	×		
一五六(一五四)		×	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	(X)		
一七五(一七三)	×		
一九六(一二九の次)~二〇〇(一九六)	×		
二二〇 (二一五の次) →二二六 (二二一) の次	冏		
二三二 (二二七) →二三四 (二二九) の次		同同	
二六九(二六四)		×	

	F)						四二)の次	(五四○) →五五五 (五	五五三
	×							三(五〇二)	五三三
	×	-						(五〇〇)	五.
	×					~		(四九五)	五〇六
	×							(四九四)	五〇五
	×	欠 1				-		(四八八)	四九八
	×	(1)				.,		(四八一の次)	四九一
	×	~						四八二(四七三)	四八二
		726		(×)				四七三(四六四)	四七三
(志丙)四七三(四六四)を書	- Charles	(71		※ ●				(四六一)の次	四七〇
	×	1)						(国川国)	四四
	×							(國川川)	
				**	×			四〇三(三九七)	
	×							三九八 (三九二)	三九八
	×							(三八九)	三九五
	×						九七)	三八〇 (三七四) ~四〇三 (三九七)	三八〇
が続く	同						(三年三)	(三七四) •三七九 (三七三)	三八〇
て三六六(三六〇)第二可以下(東乙)三六五(三五九)初句	※ ×							(三五九)	三大五
		ID)	同				五五)の次	三五七 (三五一) →三六一 (三五五) の次	三五七
	×							二七三(二大八)	二七三
	×							(三大大)	= + -
備考	想 大 東 玉 三	神米穏甲	都書甲静	志丙志丁	国 志甲 志乙	長	明本番号)	本番号(陽	版

大 1	(志丙) 一行分空白		×	* ×	二
大 ・		×			- 〇七八(1 〇六二)
大 ・	(志丙)詞書あり。一行分空白		×	*	一〇六四(一〇四八)
大 ・		同			一〇一一(九九六)•一〇一〇(九九五)
			同		一○○九(九九三)→一○一九(一○○四)の次
の次				同	九八九 (九七四の次) →九九三(九七八)の次
	(本行)		同		九六七(九五三)→九七一(九五七)の次
	てうらみしそでに… を書入れ(都)陽明本独自歌「いかにし		※ ●		九〇一の次(八八七)
の次					八四五(八三〇)
の次	(神) 朱筆補入		※ (X)		七七七 (七六二)
(五五九) (五五九) (五五九) (本丙) 七〇九 (大九三) を (大九大) の次 (本元) 三六五 (三五九) (本丙) 七〇九 (大九三) を ※● (本元) 三六五 (三五九) (本丙) 七〇九 (大九三) を ※● (本丙) 七〇九 (大九三) を		×		→	七三七(七二二)~七四二(七二七)
(大九六)の次 (五五九) (五五九) (五五九) (大九六)の次 (大九六)の次 (大九六)の次 (大九六)の次 (本元) 三六五 (三五九) (本元) 二十二)を (本元) 七〇九 (六九三)を		<	×		七二四(七〇九)
(六九大) の次 (五五九) (五五九) (元五九) (元五九) の次 (元五九) の次 (元五九) の次 (元二十二) で (元元)の次 (元二十二) で 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一			同		七○九(六九三)→七二六(七一一)の次
(元五九) (五五九) (五五九) (五五九) (五五九) × ※◆ (本元人) (本元	(志丙)七〇九(六九三)を書入れ		•	*	七〇七(六九二)の次
 X ※ ※	(重出)				
X	ろの松風きけは…一を書入れ(都)六八六(六一二)「Sわし		※ ●		六二六(六一一)の次
不有 4	が続くがミファイミプロン第二名以下			×	六一四(五九九)
2 省 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	て三大大(三大)、第二寸人で(東乙)三六五(三五九)初句				五八九(五七五の次)
可同 X		×			五八八(五七五)
19 才看 4) 县 国 志 志 志 右 書 韵 祥 米 想 愁 大 東 東 三 備					五七三(五六〇)・五七二(五五九)
9 才 看 4 2 5 5 6 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		×			五六八(五五五)
月 4 6 多 2 是 3 甲 2 丙 丁 3 甲 4 〒 1 : 甲 2 : 甲 2		想 想 大 東 東 三	志志都書静神米	長 国 志 志	版本番号(陽明本番号)

(穂甲) 二首分空白		※ ×		«	一五六六(一五四九)~一五六七(一五五〇)
(※ ×			一五五五(一五三八)
は苔むすべはな…一を書入て(都)陽明本独自歌「ふかき山			* •		一五二八の次(一五一一)
	×				一五一〇(一四九二)
		同			一五〇〇(一四八二)・一四九九(一四八一)
			同		一四九三(一四七五)→一五○○(一四八二)の次
	同				一四八九 (一四七一) •一四八八 (一四七〇)
				〔×〕 欠 欠	一四五八 (一四四〇)
	同				一三八七(一三六八)•一三八六(一三六九)
				同 (712 (712	一三八〇(一三六二)・一三七九(一三六一)
	×				一三七九(一三六一)
	周				三 ○ (二九二) → 三○七 (二八九) の次
		同		69 (1 69 (1	二八九(二七一)→ 二九二(二七四)の次
ノー・ノコン言語で、ノイ	×				〇二 (一 八五)
(書甲) 一二〇一歌より一二〇二			※ ×		三〇一 (一八四)
		固		••••	一一九匹(一一七七)→一一九九(一一八二)の次
		同			一一九四(一一七七)→一一九七(一一八〇)の次
るなみたにけふは・・・ を書入れ (都) 陽明本独自歌 「なかれいつ			※ ●		一五七の次 (一四一)
(都)一一四七(一一三三)			※		一一五〇(一一三二))の次
備	大東甲東乙	育 神 米 穂 穂	志志都書	1 日 志 志	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

二〇六詞書を欠き補入		<u> </u>		(X)	* (×) * (×)														- TOス (TOE)
神	同	同	同	※ 同	※ 同 ※	同	同	>	同	同	同同	同	同	同	可	固	同	百	(IOI) + (IOI) + (IOI) + (IOI)
				(×)	(X)	(x)	×	×	×	×	×	(X)	X	×	×	×	×	×	一九六 (一九二の次)
は 本 行				(X) (X)	(X)	(×)	×	×	×	×	×	(x)	X	×	×	×	×	×	一七九(一七六の次)
六の次) 歌を書入れ(神宮) (天乙)(神宮) 一七九(一七				•	※ • ※														一七七 (一七五) の次
						(x)	×	×	×	×	×	(X)	X						一七五(一七三)
				(X)															1七〇(1六八)
						同													一七(一五)→一二三(二二)の次
	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	一一三の次(一一一)
Ø Ø	[百]	间	同	固	间						同	同	间	同	回	ā	同	[ä]	七九(七○)→七二(六九)の次
九)の次、(筑)七八(七五)補入位置は、(日)七二(六						* (×)	×	×	×	X	<u>※</u> (×)								七九(七〇)
							[b]												七八(七六)→八四(八一)の次
		同																	七七(七五)・七六(七四)
				×	(x)														七七(七五)
	同	间	[7]	同	[13]	[a]	[6]	间	[6]	[ii]	[o]	同	[0]	同	同	可	固	间	五七(五三)・五六(五四)
				(\times)	(×)	×	×	×	×	(x)	X	(X)	×	×	×	×	×	×	三七(三四の次)
	同	同	[1]	[ដ]	[6]	同	[1]	同	同	同同	同	同	[8]	间	同	可	ñ	间	三六 (三三)・三五 (三四)
				(X)	(×)	×	×	×	×	×	×	(x)	×	×	×	×	×	×	一一(九の次)
				(X)	(×)	(x)	×	×	×	×	X	×	×	×	×	×	×	×	五(四の次)
備考	多	茶乙	書丙	神宮	天乙	筑	京	茶甲	天甲	日市	東洋	関乙	関甲	京研	松	書乙	学	陽	版本番号(陽明本番号)
	類第 本四	本	類十	Ξ	第		7	本	類		=	9节	第:		本	類	_	第	

												>]]		
		×															四三八(四三一)
11=			行	(X) (X) (X)	(×)	×	×	×		(x)	X	×	×	×	×	×	四二〇(四一三の次)
					-						※ ●	*					四一三(四〇七)の次
					欠	同											四一〇(四〇四)・四〇九(四〇三)
					321	×	× 欠	×		(x) ×	×						川宮川 (川川大) ~川宮川 (川川七)
		×	×		(31	×	× 204	×		(X)	×						川四一(川川五)
					5) ~	×	× 4 (2	×	-	(X)	×						
					35		×. 00)	×	×	×	×						三三九 (三三三)
_					2 (3	×	× ~ :	×	•	(x)	×						川田〇(田川四)〜川田八(田田川)
第二類本の多くが三二八					4 6)	×	×	×	•	×	×						三元(三三三)
					補写	×	× (5 7 7)	×	. •	(×)	×						三人(三三)
九(三一三)の次(天乙)書入れ位置は三一			^	* (×) ×	(X)	×	×	×		(X) X	×	×	×	×	×	×	三一七(三一一の次)
(市)二八九 (二八四) 歌重出								※ ●									二八六(二八一)の次
		×															三二九 (二二四)
			اسا	同同													
一八(二一四)の次(関乙)書入れ位置は二			(X)	(X)	(×)	×	×	×	, `	(x)	× ※ (×)	X	×	×	×	×	二三〇(二一五の次)
									同								二二〇(二一五の次)・二一九(二一五)
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	二一三の次(二〇九)
			(×)	(X)	(×)		×	×	^`	(X)	X	X	×	×	×	×	(二〇六の次)
備考	多	茶乙	神呂書丙	天乙神宮	筑	茶甲京	天甲	市	日	関乙東洋	関甲	京研	松	書乙	学	陽	发
	類第 本四	本	三類	第		本		類	=		第		本	類	第一		

(重出)、(日)(多)は本行	* •			•	※	※				•	*	•	*						六八六(六一三)
乙)(日)(筑)(天	间	同	同	同	同	岡	同		同同	同	同	同	同	回	可	同	同	同	六八六(六一二)→六二六(六一二)の次
		×																	六五四(六四〇)
												(X)							☆○九(五九四)~六一九(☆○四)
					(X)	(x)	×	×	×	×	×	×	×	X	×	×	×	×	五九六(五八一の次)
				` 何 (X)	[×]	×	×	×	×	×	×	×	×	<	×	×	×	×	五八九(五七五の次)
				同	同														五七八(五六五)→五七五(五六二)の次
									间										五六三(五五一)→五六六(五五三)の次
	同	്	同	同	同	同	同	同		司	同	固	固		固	同	同	固	五六四(五五〇)・五六三(五五一)
				` · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	(×)	(X)	×	×	X		×	(×)	×	欠	×	×	×	×	五四一(五二八の次)
				~ 府 (×)	(×)		×	×	X		×	×	×	443	×	×	×	×	五三七(五二五の次)
												间		4 3					五〇七(四九六)・五〇六(四九五)
			-	``神 (X)	[X]		×	×	X		×	(×)	×	6) -	× ×	×	×	×	五〇二(四九一の次)
					~		×							~ 5	_				四九八(四八八)
(六○五)に同じ				(X)	(X)		×	×	×		×	×	×	91 (5	×	×	×	×	四九一(四八一の次)
					~~~	^ (x)	×							77)	\				四八五(四七六)
				· [X]	(X)	^ (x)	×	×	×		×	(×)	×		×	×	×	×	四六七(四五八の次)
		盲																	四六六(四五八)・四六五(四五七)
			••	(X)		^ (x)	×	×	×		×	×	×		×	×	×	×	四六二 (四五四の次)
		同	简	同	[a] i_;	同	T T	同	同	同	间	同	同						四六〇(四五三)。四五九(四五一)。四五八(四五二)
備考	多	茶乙	書丙	神宮	第 天乙	京金	茶甲	天甲	市	日	東洋	関乙	関甲	京研	松	書乙	学	陽	
	類第	本	類	第三			4	本	類		=	"	第	_	本	類	-	舞	「 坂 本 路 号 ( 最 明 本 番 号 )

		×		!										-					一〇四五(一〇二九)
		×		(X)	(×)	(×)	×	×	×	×	×	X	×	×	×	×	×	×	101三(100七0冬)
	同	同	同	固	同	同	同	同	同	[ii]	同同	间	间	[ii]	间	ō	同	同	一〇〇七(九九四)→一〇〇九(九九三)の次
		×																	100三(九八八)
		×																	九九〇(九七五)
		×		(X) 1a	(X)	(×)	×	×	×	×	×	(×)	×	×	×	×	×	×	九八九(九七四の次)
記あり(関乙)(東洋)、「イ本」と注											间	同 ※ 同	<b>※</b> 同						九七八(九六四)↓一○五七(一○四一)の次
	[11]	[6]	[6]	间	[6]	[8]	[6]	[7]	间	同同	间	[1]	固	[8]	Ö	高	同	[0]	九六〇(九四五)・九五九(九四六)
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	九〇一の次(八八七)
	同	同	间	[ii]	[8]	[2]	[0]	间	同	同同	同	同	同	[2]	冏	同	同	a	九〇〇(八八三)→八九七(八八二)の次
			$(\times)$																八九七(八八二)
						(x)	×	×	×	×	×	(X)	×						八三 (八〇七) ~八三〇 (八一五)
(茶乙)八一八 (八〇三) 重出		<b>※</b> ●	\ <b>*</b> *																八一八(八〇三)の次
		×	13	(X)	(×)	(×)	×	×	×	×	×	(x)	×	×	×	×	×	×	八〇五(七九〇の次)
	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	七九〇の次(七七六)
		×																	七七四(七五九)
						(x)	×	×	×	×									七六四(七四九)
		[8]	T)	间	同	[B]	同	同	同	同同	同	同	ក	同	同	П	固	同	世間 (七〇七)・七三二 (七〇八)
		×																	七〇九(六九三)
			n	同	同	同	[ii]	同	同	同同	同	间	间				同	同	七〇九(六九三)・七〇八(六九四)
備	多	茶乙	書丙	神宮	天乙	筑	京	茶甲	市	H #	東洋	関乙	関甲	京研	松	書乙	学	陽	7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
	類第 本四	本	類	第三	$\dashv$			本	類		=		第		本	類	_	第	版 本 番 号 、 易 明 本 番 号 ン

	第	類本		第		=	類		本			第	Ξ	類	本	類第 本四	
郑 本 卷 号(陽 明 本 番 号)	陽学	書乙松	京研	関甲	東洋	日	市	天甲	茶甲	京	筑	天乙	神宮	書丙	茶乙	多	備考
10四六(10三0) →10四九(10三三) の次							同										
〇八〇( 〇六四)・ 〇七九( 〇六三)													同				
一〇九一(一〇七五)の次		<b>※</b> ●	-														(松)一○九四(一○七六)
○九四( ○七六)→ ○九 ( ○七五)の次	同	同	F.3	同同	[8]	同	[a]	间	[6]	同	间	间	同	[17]	同	固	
	×	×.		×	×		×	×	×	×	*	<b>※</b> (×)	× <b>※</b> (×)	<b>%</b> (×)			(第)   一二(一)九六
											←				同		書入れ(書内) 貼紙して
四七(   三三) →   五(   三 ) の次	同	同	_	同同	同	[a]	[6]	同	同	同	同	同	同	同	[2]	间	
一一五七の次(一一四一)	0	0 0 0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	第一十六七(一五一)
一六八(二五一の次)	×	×		× (×)	×		×	×	×	×	<b>※</b> <b>⇔</b>	<b>※</b> (×)	×	×			者まで欠き補写(天乙)巻
							×										
二二三 (一九六)										X							
□     三   一九六   →   二   九   二   □   〕 の次							同										
											同						
- 1 1 三五(1 1 1 1 七の次)	×	×		×	×		×	×	×	×	(x)	<b>※</b> (×)	× <b>※</b> (×)	(×)			(天乙)巻末に書入れ(書
二七三(二二五五) → 二七五(二二五七) の次										同							
			<u> </u>												同		
==〇三(1二八五)・1三(1二八四)												同					
三一四( 二九六)→ 二九九( 二八一)の次			-													同	
三二四(二二九六)•一三二三(二二九五)															同		
	同	同	固	同	同	同	同	同	[6]	间	同	固	面	间	同	固	

付

表三

松屋本系諸本異同一覧

一、平井卓郎氏蔵版本書入れ本

A、版本にあって本書に欠く歌 73(71)~87(84)、18(16)、11(19)、28(26)~38(36)、15(15)、16(19)、17(170)、17(173)、17(176)、17(176)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179)、18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(179) 18(17 1(1)、2(2)、5(4の次)、11(9の次)、18(16)、37(4の次)、39(36)、40(37)、52(49)、53(50)、60(57)

64 (61)

五五八(一五四一)→一五六三(一五四六)の次	五五七(一五四〇)		五八0次(1五一) 010 0※0※0 0	五〇五(一四八七)	四九八(一四八〇)→一五〇〇(一四八一)の次 04	四一六(一三九八)・一四一五(一三九七)以	三八六 (一三六九) の次 下	二三八七(一三六八) - 二三八六(一三六九) 同 同 同 同	三大三 (一三四五) の次	一三五七(一三三九)→一三六三(一三四五)の次 同 同 同		三四七(二三二九)十三四六(二三二八) 同	等 者 松 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	版本. 番号 3 易明本番号 2 第一類本
-			Ö					同		同			京研	
			0	×		同		同同	<b>※</b>				関甲	第
			0	×				同	•			i	関乙	
İ			0	×				同		同			東洋	=
ł			0	×				同		1.3			市	ako:
	*		0	×				同					天甲	類
	*		0	×				同					茶甲	本
	*		0	×	同			同					京	
			0	×				同					筑	
			0					同	<del></del>				天乙	
			0					同					神宮	第三
		(x)						同					書丙	類
同			0					同				同	茶乙	本
			0				*	同			同		多	類第 本四
	句のみ (天甲)(茶甲)(京)上二		(松)(京研) 一五二九(1			į	(多) 一三八七(一三六八)	3	(関乙)一三五七(一三三九)を書入れ				備	

59] 1310 1292 764 1136 900 883 V 53(55の次)、54(58の次)、54(51)、56(53)、56(55)、59(55の次)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56)、59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59(56) 59 46(45)~48(45)、43(44)、48(47)、49(48)、49(48)、59(49)、50(49)~50(49)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50)、58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),58(50),5 366(36), 38(38), 38(38), 39(38), 39(38), 39(38), 39(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(39), 40(3 37(31の次)、32(31)、32(33)、33(32)、33(32)、33(32)、34(33)、34(34)、34(41)、  $(21) \sim 23(22)$ ,  $(24) \sim 24(23)$ ,  $(24) \sim 24(25)$ ,  $(25) \sim 23(26) \sim 23(25)$ ,  $(25) \sim 23(25$ 1072 1090 1074 6(52), 6(62), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6(63), 6 781(76)~783(788)、79(775)、80(79の次)、 688 (67) 69 (67) 69 (68) 71 (70) 721 (70) 732 (77) 74 (72) 775 (76) 777 (76) 779  $\begin{array}{c} 1327\\ 1309\\ \hline)\\ 1352\\ \hline)\\ 1352\\ \hline)\\ 1357\\ \hline)\\ 1367\\ \hline)\\ 1403\\ \hline)\\ 1408\\ \hline)\\ 1470\\ \hline)\\ 1480\\ \hline)\\ 1538\\ \hline)\\ 1522\\ \hline)\\ 1538\\ \hline)\\ 1522\\ \hline)\\ 1538\\ \hline)\\ 1526\\ \hline)\\ 1543\\ \hline)\\ 1567\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1567\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1568$ \\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ 1568\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ 1568\\ \hline)\\ 1568\\ 1568\\ 1568\\ 1568\\ \hline)\\ 156 922 (908) ~ 926 (912), 1061 (1045), 1062 (1046), 1064 (105), 1070 (1054), 1070 (1057), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 (1058), 1070 ( 1138 (121)、155 (1138)~115 (140)、116 (151)、116 (151)、116 (151)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171)、1174 (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) (171) 197 (1075)、19(4)、110(1085)、110(1091)、110(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、111(1091)、11(1091) (1091) (1091) (1091) (1091) (1091) (1091) (1091) (1091) (1091) (1091) (1091) (1091) (1091 93(916)、93(922)~94(928)、96(945)、98(973)、98(974の次)、100(994)、 806 791 840 825), 841 826), 867 852), 877 862), 878 864), 892 877, 895 881), 1201 1184 1204 1187 408 (402), 410 (404), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 412 (406), 444 (437) 449 (442) 1081 1065 1083 1067 1235 1217 の次)、 1236 1218 1237 1010 995 1119 1102 454 447 348 342 1023 1007 007 の次)、 1087 1071 1088 414 408 416 1121 1104 455 448 (48) 519 508

B、版本にない、本書所収歌(以上三八七首)

[九首]、74(76)の次 [五首] 78(76)の次 [三首]、89(85)の次 [十首]、 33(34)の次 [三首]、 6(5)の次 [五首]、 20(18)の次、31(29)の次、55(52)の次, 34(33)の次 [五首]、 38(37)の次、45(46)の次、 16(18)の次 [十首]、 51(50)の次、 ※別(88)の次、12(10)の次、12(12)の次、128(17) 555(42)の次、 24(20)の次〔五首〕、※21(70)の次、 556(543)の次、

の次、※55(51)の次 (以上六九首)

(※印を付した三首は、陽明本系諸本にもみられる。従って松屋本系の独自歌は六六首。)

又、10(197)歌の次に41(44)歌が重出する旨の書入れがある。

Ç 版本と排列の異なるもの

※□ 36(33)・35(34)、※□ 57(53)・56(54)、□ 121(19)→88(85)の次、四 127(12)・126(14) (32)・37(31)、※世54(55)・53(55)、戊野(66)・88(87)・89(85)、※克14(33)・11(13)・15(13)・14(13)、※回32(13)・ 田18(18)→20(16)の次、出328

1331(1314)、二 1358(1340) → 1366(1348) の次、※三 1387(1368)・1386(1369) (※印を付した排列は、陽明本系諸本にもみられる。)

二、天理図書館蔵丙本

A、版本にあって本書に欠く歌

116(151の次)、18(170)、19(174)、20(184)~204(187)、125(127の次)~12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127)、12(127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (127) (1 (24), 1267 (12), 1268 (12), 1271 (12), 1264 (12), 1264 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 (12), 1271 1261 1243 1263

-(-)~10(89)、10(99)、10(99)~11(800次)、11(19)、11(19)、11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19) 11(19)

Ŗ 版本にない本書所収歌

1260(1242)の次、1288(1270)の次、 ※52(55)の次、また18(62)歌の次に47(44)歌が重出する。

(※印を付したものは、 陽明本系諸本にもみられる。)

Ç 版本と排列の異なるもの

(以上はすべて陽明本系諸本にもみられる。)

付

420 420 , 460 (40) 440 , 294 . 198)~204 200), (46), 50(47),  $33(31) \sim 36(33)$ , 52(49), 53(50), 19(167), 17(168), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167), 19(167)29(刀)→32(30)、刀(5)、り(17)、刀(り)、32(刀)、刀(18)、刀(20)、24(22)、刃(4の次)、 420(413の次)、 329 342 336 336 (285) ~ 293 (288) (288) (250)~258 (253), 234 かなる」、「友もなし」、「ときしもあれ」、「きく人の」、「過きぬる」、18(18)、18(18)、19(18)、20(17)、18(17)、 173(17)~175(17)、180(17)、18(17)、176(17)、17(17の次)、186(18)~18(18)、19(18)~20(19)、『拾玉集』巻三より「ほの 93 (93)  $(0)', 15(13) \sim 15(18)', 15(15)', 15(19)', 15(15) \sim 15(15)', 15(15)', 15(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(15)', 16(1$ 40(37), 46(43), 47(44), 56(54), 58(55), 57(53), 55(52), 163(161), 54(51), 9(8)、1(1)~6(5)、8(7)、11(9の次)、 109 (106) ~ 137 (135) , 139 (137) , 140 (138) , 138 (136) , 142 (140) , 143 (141) , 108 (105) , 415 395 (445)~456 (449), 419 464 235 334(328), 407(40)~413(40), 204 (379) ~ 387 (381) √ 174 396 (421) ~ 431 (424) **~** 387 465 248 . 175 20(205)~11(26の次)、27(22)、28(23)、72(27)~23(23)、27(32)、 409 , 458(45)~46(458の次)、 245 • 273 270) **~** 277 272 272), 476 246 • 278 383 (429) ~ 440 (433) **`** 201 410 , 306 ~ 323 317 , ~ 425 **(** 242 • 276 279 233 • 318 324 457 (450) (451 (444) (472 (463) (399 (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) (393) 16(14) ~ 18(16), 7(6), 10(9), (427), 435 (428), 405 (399), 433 (426), 435 • 277 740 390 247 • 384 325 × (337) ~ 371 (365) **.** 436 , 249 320 ~ 329 323 , 323 , 323 391 (280)~289 (284), 241 (241 417(41)~419(413), 441 (441) 238 , 267 367 254 . 139 48(45), 63(60)~95(92), 97(94)~107 230 × 437 382 274 389 366 **×** 255 • 1059 416 \ 425 418 394 . 442 **•** 142), 160 158), 51 49 438 , 319 385 X 388 , 243 • 443 , 41(38) ~ 45(42), 38(35) ~ 368 ~ 459 (257) ~ 268 (263), 386 X 244 () 326 378 462 (462) 397 293 24 265 231 237 181 408 256 461 439 (439) 275 470 400 471

#### <付記>

また、何かと御教示にあずかり研究上の便宜を賜った斯道文庫に厚く御礼申し上げる。 貴重な御所蔵本の閲覧を許され、 全国の公私にわたる図書機関とその関係者各位に謹んで感謝の意を表する。 本稿はトヨタ財団の研究助成を受けて現在斯道文庫に於て進行中の「国書並びに漢籍総目録の編纂」(代表者・阿部隆 何かと御高配を賜った平井卓郎博士・久曾神昇博士・神作光一博士・市岡勝太郎氏をはじ

の一端として発表するものであることを付記し、関係各位に深謝申し上げる次第である。